エピテクストの通時的創造力(1)

Les *Cahiers pour l'analyse* と *l'Archéologie du Savoir*

重 見 晋 也

はじめに

ジェラール・ジュネットは *Palimpsestes*[1)] の中で、或るテクストが他のテクストの間に結ぶ関係性を「テクスト関係性 « transtextualité »」[2)] と呼び、その中に「間テクスト性 « intertextualité »」、「パラテクスト性 « paratextualité »」、「メタテクスト性 « metatextualité »」、「ハイパーテクスト性 « hypertextualité »」、「アルシテクスト性 « architextualité »」の 5 つを分類している[3)]。各テクスト関係性は、自律し独立したテクスト実体ではなく、相互に関連しあう複雑系として表現されるものである。それと同時にテクスト関係性の各々は、アスペクトとしてテクスト間の関係性のある側面を指し示すと同時に、独立したテクスト実体として他のテクスト実体と関連しあうことによって、一般的なテクスト関係性を形成するものである。ジュネットの提示したテクスト関係性の考え方は、一つの中心的なテクストの存在が前提されるものであり、そうした中心的なテクスト実体と別のテクスト実体とがどのように関わり合っているかを占めそうとしたものであると評価することができる。

これらのテクスト関係性の中で、ジュネットは *Palimpsestes* において、ハイパーテクスト性を特に取り上げて考察している。ジュネットは「先行するあらゆるテクストから、単純な変形（…）によって、あるいは間接的な変形――これを模倣と言うことにしよう――によって派生したあらゆるテクストを、ハイパーテクストと呼ぶ」[4)] と述べ、ハイポテクスト／ハイパーテクストの間に如何に変化に富んだ関係性を考察しうるかを、文学作品の例を豊富に挙げながら考察している。

ジュネットが 5 つに下位区分しているテクスト関係性の中でもパラテクスト性という用語は、テクスト関係性の概念とおなじく既に *Introduction à l'architexte* で提示されていたものだが、当初はパスティッシュやパロディを念頭に置いており、ジュネットが後にハ

イパーテクスト性と呼ぶようなテクスト現象を指し示していた[5]。しかし、*Palimpsestes* では、テクスト関係性の概念が整理された結果、パラテクストを次のように再定義する：「パラテクストとはたとえば次のようなものだ――表題・副題。章題、序文・後書き・緒言・前書き等々、傍注・脚注・後注、エピグラフ、挿絵、作者による書評依頼状・帯・カヴァー、およびその他数多くのタイプの付随的な、自作または他者の作による標識などがそうなのであって、これらのものがテクストにある種の（可変的な）囲いを、そして時には公式もしくは非公式のある注釈を与える」[6]。*Palimpsestes* において拡大されたパラテクスト性の概念を、ジュネットは1989年の *Seuils*[7] で稿を改めて考察している。

Seuils においてジュネットがパラテクスト性の概念に加えた変更のうちで重要なものは、パラテクスト性あるいはパラテクスト[8]の下位区分として、新たに「ペリテクスト « péritexte »」と「エピテクスト « épitexte »」という 2 つの概念を導入したことであろう[9]。ペリテクストは、*Palimpsestes* においてジュネットがパラテクストとして提示していた概念に相当すると考えられるが[10]、エピテクストは対談、インタビュー、書簡や日記など、中心的なテクストと物質的空間性を共有していないテクストについて、それらをパラテクストとして規定している[11]。換言すれば、ペリテクストが決してテクストから分離されないままテクスト関係性を構築するのに対して、エピテクストはしばしば後から解釈行為の過程でテクスト関係性の中に組み込まれていくものとして考えられているのである。

本稿では、ミシェル・フーコーの *les Mots et les Choses*[12] および *l'Archéologie du Savoir*[13]（以下、*Archéologie* と略す）のエピテクストとして、*Cahier pour l'Analyse* 誌（以下、*Cahiers* 誌）に掲載されたフーコーに宛てた質問状とそれに対するフーコーの回答に着目し、*Archéologie* のテクスト関係性に組み込まれるべき *Cahiers* 誌という空間が要求するいくつかのテクスト条件についての考察を通して、エピテクストがテクストに対して行使する通時的な創造力を析出しようとするものである。

*　　*　　*

1966年に発表された *Les Mots et les Choses* はミシェル・フーコーを当時の知識人界[14]の前面に押し出したといえる。事実、作品発表後から1969年の *Archéologie* 発表までの間にフーコーが作品に関連して受けたインタビューは以下に挙げるように 6 編である：

- « Michel Foucault. *Les Mots et les Choses* » (entretien avec R. Bellour), *Les Lettres françaises*, nº 1125, 31 mars-avril 1966, pp. 3–4.[15]
- « Entretien avec Madeleine Chapsal », *La Quinzaine littéraire*, nº 5, 16 mai 1966, pp. 14–15.[16]
- « Michel Foucault et Gilles Deleuze veulent rendre à Nietzsche son vrai visage » (entretien avec C. Jannoud), *Le Figaro littéraire*, nº 1065, 15 septembre 1966, p. 7.[17]

– « Che cos'è Lei Professor Foucault ? » (« Qui êtes-vous, professeur Foucault ? » ; entretien avec P. Caruso ; trad. C. Lazzeri), *La Fiera letteraria*, année XLII, nº 39, 28 septembre 1967, pp. 11–15.[18)]
– « En intervju med Michel Foucault » (« Interview avec Michel Foucault » ; entretien avec I. Lindung ; trad. C. G. Bjurström), *Bonniers Litteräre Magasin*, Stockholm, 37e année, nº 3, mars 1968, pp. 203–211.[19)]
– « Foucault répond à Sartre » (entretien avec J.-P. Elkabbach), *La Quinzaine littéraire*, nº 46, 1er–15 mars 1968, pp. 20–22.[20)]
– « Lettre de Michel Foucault à Jacques Proust », *La Pensée*, nº 139, mai-juin 1968, pp. 114–117.[21)]

これらのインタビューには、フランス国内の雑誌だけではなく、イタリアやスウェーデンの第二次世界大戦前から続く歴史ある雑誌が独自に取材したものも含まれており、この作品によってフーコーの名がヨーロッパ中に拡がったと考えることができるだろう[22)]。これらのインタビューは2つの点において共通しているといえる：1）フーコーの著作を新たな時代の哲学と認めた上で、考察の現代的価値を作者自身から聞き出そうとしていること、2）フーコーに先立つ世代の哲学者たちとの関係において1966年当時の哲学の現状についてのフーコーの理解を引き出そうとしている点である。第1点目に関しては、例えば、*Les Lettres françaises* 誌でベルールが、17世紀から19世紀へと時代が進む中で「人間」という概念が変化していると主張するフーコーに対して[23)]、« Comment se présente alors, sur ce fond, notre situation, aujourd'hui ? »[24)] と質問をぶつけ、*Les Mots et les Choses* の現代的意味を問うている例を挙げることができる。また、*Bonniers Litteräre Magasin* 誌のインタビューで出された質問[25)]に見られるように、構造主義という新しい思潮との関係に焦点を合わせた問いや、イタリアの *La Fiera letteraria* 誌に掲載されたインタビューで確認することができるように、フーコーが *les Mots et les Choses* の副題に用いた « archéologie » の用語法に関する質問[26)]などを挙げることもできる。一方で第2点目に関しては、特に *La Quinzaine littéraire* 誌に掲載された各インタビューにおいて顕著だが、サルトルやメルロ＝ポンティといった *Les Temps modernes* 世代の哲学者の名前を挙げて彼らとの関係についての説明を求めていたり[27)]、« humanisme » についての見解を問い[28)]、前世代の哲学者たちとの関係を明らかにすることでフーコーの著作をフランス哲学の中に位置づけようとするインタビュー群を指摘することができるのである。いずれにせよ、これらのインタビューがフーコーの著作の現代的意義を認めるとともに、その思索の斬新さを哲学史上に位置づけることで、「著作のおかげでフランスだけではなく、公の人物になった」[29)]ことを示していることに間違いはないだろう。

Les Mots et les Choses の成功は、しかしながら、フーコーに自著についての反省を促

す契機にもなったのであり、その内省が1969年に発表される *Archéologie* の理論的著作へと結実することになる。事実、フーコー自身が *Archéologie* の序文の末尾で次のように述べ、執筆の動機を吐露していることを確認することができるのである。

> Ce travail [de *l'Archéologie du Savoir*] n'est pas la reprise et la description exacte de ce qu'on peut lire dans l'*Histoire de la Folie*, la *Naissance de la Clinique*, ou *Les Mots et les Choses*. Sur bon nombre de point, il en est différent. […] dans *Les Mots et les Choses*, l'absence de balisage méthodologique a pu faire croire à des analyses en termes de totalité culturelle. Que ces dangers, je n'aie pas été capable de les éviter, me chagrine : […] sans les questions qui m'ont été posées, sans les difficultés soulevées, sans les objections, je n'aurais sans doute pas vu se dessiner d'une façon aussi nette l'entreprise à laquelle, bon gré mal gré, je me trouve désormais lié.[30)]

ところで、既にこれまでに見てきた *Les Mots et les Choses* に関するインタビューや質問の他に、フーコーが *Archéologie* という「企て entreprise」を明確化する契機になった出来事として、フーコー自身が 2 つの質問状の存在を *Archéologie* の中で指摘している[31)]。すなわち、1 つはパリ高等師範学校（以下、ENS）の「認識論サークル」« le Cercle d'épistémologie »（以下、Cercle）が発行していた *Cahiers* 誌の第 9 号に掲載されているいくつかの質問[32)]とそれに対するフーコーの回答[33)]であり、もう一つは、1968 年 5 月号の *Esprit* 誌がフーコーに宛てた11の質問から 1 つを選んで出された回答である[34)]。これら 2 つのテクストは *Les Mots et les Choses* 発表から *Archéologie* が発表されるまでの間に出されたものであるという点に加えて、それらがまさしく *Les Mots et les Choses* での考察を反省するとともに、次の *Archéologie* へとフーコーが自らの考察を進めていく思考過程を確認することができるという点でも重要なエピテクストと見なすことができる。中でも *Cahiers* 誌は、研究誌の発行に関わる、運営方針、人的体制そして掲載内容の 3 点において、一つの変遷を示しているだけではなく、それがフーコーの出てきた ENS と深く関わっているという点からも、*les Mots et les Choses* から *Archéologie* への変遷をエピテクストを中心に検証する際の重要性が強調されねばならないだろう。

1．*Cahiers* 誌とスイユ出版社

Cahiers 誌は、ENS の研究グループである Cercle が主体となって、1966年から1969年までの 4 年間に全部で10号が発行された研究誌である[35)]。*Cahiers* 誌の創刊号から第 7 号までは、抹茶色のタイプ原稿をそのまま製本しており、商業誌のレベルに達しているとはとても言い難い体裁である。第 1・2 合併号の表紙裏には、« Administration : Cahiers pour l'Analyse, 45, rue d'Ulm — Paris Vè » とあり、その下には « LES CAHIERS POUR L'ANALYSE sont édités par "LE GRAPHE" » と編集責任が明記されている。さらに、第

3号では、« Imprimerie Copédith, 70, rue de Flandre — Paris XIXè » と印刷所名の記載も開始されている。こうした発行形態が続けられるのは、しかしながら、第7号までであり、第8号からは同誌の装丁に大きな変更が加えられたことを確認することができる。すなわち、出版こそ第1号から続いて « la Société du Graphe » が担当しているものの、印刷については第3号から明記されていた « Imprimerie Copédith » に代わってスイユ出版社が、配本と併せて担当していたことを確認することができる[36)]。

各号はタイトルを付されて発行されており、このスタイルは創刊号から最終号となる第10号まで変化していない。発行された全10号のタイトルと発行年月を一覧にして以下に挙げる。

nº 1 : « La Vérité », janvier-février 1966
nº 2 : « Qu'est-ce que la Psychologie ? », mars-avril 1966
nº 3 : « Sur l'Objet de la psychanalyse », mai-juin 1966
nº 4 : « Lévi-Strauss dans le XVIIIe siècle », septembre-octobre 1966
nº 5 : « Ponctuation de Freud », novembre-décembre 1966
nº 6 : « La Politique des philosophes », janvier-février 1967
nº 7 : « Du Mythe au roman », mars-avril 1967
nº 8 : « L'Impensé de Jean-Jacques Rousseau », octobre 1967
nº 9 : « Généalogie des sciences », été 1968
nº 10 : « La Formalisation », hiver 1969

一覧から分かるように、Cercle の出版活動は1966年には非常に精力的で、1年間に5号を発行しているが、1967年には3号、1968年と1969年は各1号しか発行していない。しかしこのことは、Cercle が *Cahiers* 誌の発行を定期的に行う計画を持っていなかったことを意味しているわけではない。というのも、第1・2合併号では目次のページの右下部分に « PARAIT TOUS LES DEUX MOIS » と明記されているのを確認することができるからである。確かに、1966年5－6月号の第3号と1966年9－10月号の第4号との間に、1号分の空白期間を認めることができるものの、それが夏期長期休暇にあたることは容易に察することができる。つまり、創刊以来第7号までは「隔月発行」の周期で定期的に、同誌が発行されていたことを確認することができるのである。しかし、「隔月発行」という発行計画は、4年の発行期間を通して堅持されていたわけではない。スイユ出版社が発行に関与し始める第8号からは「隔月発行」という表記に代わって、「1966年1月より発行の年3回発行雑誌」[37)]と明記されることとなるからである。さらに、第8号からは同誌の装丁に大きな変更が加えられ、印刷は第3号から明記されていた « Imprimerie Copédith » に代わって配本と併せてスイユ出版社が担当していたことを確認することができる[38)]。

ところで、*Cahiers* 誌とスイユ出版社との関係は第8号に始まるものではない。1967

年3–4月号となる第7号の巻末には、同誌の定期購読についての案内が掲載されているのであるが、そこにわれわれは同出版社の名前を見ることができる：

> VENTE ET DIFFUSION
>
> – Vente à Paris : les “Cahiers pour l’Analyse” sont en vente à Paris dans les librairies suivantes :
> Librairie “La joie de Lire”, 40, rue St Séverin, Paris 5e.
> Librairie des P.U.F., 49, Bld St Michel, Paris 5e.
> Librairie “Bonnier Lespiaut”, 41, rue de Vaugiard, Paris 6e.
> Librairie “La Hume”, 170, Bld St Germain, Paris 6e.
>
> – Abonnements : tous les abonnements (Paris, province, étranger) seront adressés à J.A. Miller, ou à F. Regnault, selon le mode de règlement (voir bulletin).
>
> – Pour les libraires hors de Paris : les libraires de province et de l’étranger qui désirent obtenir les “Cahiers pour l’Analyse” s’adresseront aux Éditions du Seuil, 26, rue Jacob, Paris 6e.

加えて、ここにも載録した « VENTE ET DIFFUSION »「販売と配本」と題された囲み告知[39]からは、同誌の販路が、パリの4書店でしか購入できないというように、非常に限定されていたことを確認することができる。その他にも、Cercle のメンバーが定期購読などの事務手続きをも担当していたこと、そしてパリ以外の書店への配本についてはスイユ出版社が担当していたことなども確認することができるという点で、*Cahiers* 誌にとって重要なペリテクストとなっている。これに類するペリテクストが同誌に掲載されるのは、第5号でバックナンバーの在庫状況が巻末に付されてはいるものの[40]、定期購読に関する告知が出されるのは第7号が初めてであり、このことから *Cahiers* 誌に対してスイユ出版社がかかわるようになる第7号から同誌の編集および発行に関わる変化の萌芽を確認することができるといえよう。

スイユ出版社の介在は、編集発行方針への商業主義的要素の介入を予想させる。事実、同誌に対する読者の関心は高かったと推察される。なぜなら、第1・2合併号の第3版に添えられているバックナンバーの注文書 « Bulletin de commande » では、既に第8号までが一覧に掲載されている[41]し、第3号は第5版を数えている[42]。このことは、第1・2合併号の第3版の配本が、第7号の配本が開始される1967年5月と第9号の配本が開始される1968年夏の間に遅くとも始まっていたことを示しており、合併号は発行後2年間で3度刷り増されたことになる。また第3号も同じ時点で第5版を配本していることから、ほぼ同じ期間に5度刷り増されたことになるのである。このように増し刷りが行われた時期は、丁度 *Cahiers* 誌第8号の発行時期にあたり、正にスイユ出版社との提携関係が強化された時期と重なっているのである。以上のように、スイユ出版社の関わりが *Cahiers* 誌の発行方針の変化に決定的な役割を果たしたことが明らかになる。

スイユ出版社は知識人の政治参加と社会カトリシズムを標榜し、「現代の理解と世界の行く末を想像させる作品を刊行すること」[43]を目指して1935年に創設された出版社で

ある。現在でこそ文学および人文科学分野の出版で確たる名声を築いているが、1945年にジャン・バデとポール・フラマンの2人の創業者が、創造的および知的あらゆる分野に開かれたカタログを作成したことが現在の名声の基礎を形成している。*Cahiers* 誌が発行されていた1966年から1969年の60年代後半期には、カトリック教会の近代化改革 aggiomamento に関わる論争を展開し時事政治問題を取り上げる一方で、フィリップ・ソレルスの *Tel Quel* 誌やジャン＝ピエール・フェ主幹の *Change* 誌などで最前衛の議論の中心を占めていたし、ポール・リクールの « l'Ordre philosophique » やジャック・ラカンの « Champ freudien » などの叢書も出版しており、人文書出版の分野における地位を揺るぎないものにせんとしていた時期であった[44)]。スイユ出版社の *Cahiers* 誌への関わりも、同社のこうした人文書出版拡大戦略の中に位置していたと考えることができるにせよ、スイユ出版社が関わる以前から同誌のバックナンバーが版を重ねていたという事実を考えると、スイユ出版社の方が *Cahiers* 誌の商業レベルでの展開可能性を高く評価したに違いない。

とはいえ、Cercle がまったく無計画に *Cahiers* 誌を発行し続けていたというわけではもちろんない。スイユ出版社が関わる以前に発行された同誌第5号（1966年11−12月号）の初版では、既に述べたようにバックナンバーの在庫状況が記されているのだが、それに加えて今後の同誌への掲載予告が出されており、同誌が宣伝活動により自発的かつ積極的に読者を獲得しようとしていたことが確認できる[45)]。予告に挙げられた論文の中には、掲載が実現しなかったものもあるが[46)]、こうした予告記事の存在からは、決して無計画に同誌が発行されていたわけではないことを理解することができるのである。また同誌の発行は第10号で終了しているが、第10号の表紙裏のページには第10号を含めて第13号までを予約購読した場合、フランス国内での売価を38フランに減額するとの記載があり[47)]、第10号で発行が止まったことには発行の意志が潰えたこと以外に理由があると推察される。いずれにせよ、*Cahiers* 誌は創刊からある程度計画的に発行を続ける中で、販路の制限を受けつつも、それなりに商業的な成功を収めていたのであり、そうした *Cahiers* 誌に、当時人文書出版分野での拡大戦略を持っていたスイユ出版社が関わることによって、第8号以降編集発行方針を変化させていたことがわかるのである。そして、フーコーへの質問状とフーコーからの回答書が掲載されるのは、スイユ出版社が同誌に関わり始めた後の第9号においてなのである。

2．Cercle のメンバーとルイ・アルチュセール

Cahiers 誌の発行主体となっていたのは、前述したように le Cercle d'épistémologie という研究グループであり、その実態については同誌の奥付などから窺い知ることが可能である。

創刊号では編集および刊行に関わった人物に関する詳細を確認することはできない。しかし、« Sur l'Objet de la psychanalyse » と題され1966年5－6月号として発行された第3号からは、ガストン・バシュラールの後任としてソルボンヌの Institut d'Histoire de Philosophie des Sciences et des Techniques (IHPST) 第3代所長に就任していたジョルジュ・カンギイェームのテクストの一節がエピグラフとして掲げられる[48]とともに、Cercle の委員会のメンバーと *Cahiers* 誌の « Conseil de Rédaction »「編集評議会」として同誌第2号と同じメンバー[49]が明記されている。メンバーの記載についても、創刊号を含めた2号分は、奥付などの表記が一定していなかったが、第3号にいたってようやく創刊の混沌から脱けだし、Cercle による *Cahiers* 誌の刊行体制が整えられたと考えることができるだろう。

Cahiers 誌が、各号に掲載した Cercle の委員会メンバーと同誌の編集評議会メンバーを考察することは、とりもなおさず発行主体の人的体制の性格を把握することを可能にするし、それと併せて掲載内容の選別に関わる同誌の方針に関して予備的理解を与えてくれるだろう。編集評議会については創刊号から第10号までそれほど大きな変更はない。すなわち、« Qu'est-ce que la psychologie » と題され1966年2月号として発行された第2号では、アラン・グロスリシャール、ジャック＝アラン・ミレール、ジャン＝クロード・ミルネール、フランソワ・ルグノーの4名の名前が挙げられているのに対して[50]、第3号からはそこからジャン＝クロード・ミルネールの名前が削除される。編集評議会の3名体制は第7号まで同じ顔ぶれで続けられる。第8号から第10号までは、創刊号のメンバー、すなわちミルネールも含めた最初の編集評議会のメンバーに加えて、あらたに、アラン・バディウの名が挙げられて5名体制となっている。バディウは1956年に ENS に入学し、サルトル、マルクス＝レーニン主義、毛沢東主義と関心を移していった学生で、ルイ・アルチュセールの第1世代の「弟子」である[51]。このように編集評議会のメンバー構成からは、一貫した研究誌の発行体制の一端を窺うことできる。

一方で Cercle の委員会メンバーについて見てみると[52]、明記されていない第1・2号を除いた第3号から第7号までは、変更されることなく5人の名前が連ねられている。すなわち、ジャン＝クロード・ミルネール、ジャック・ブヴェレス、ジャン・マティオ、ジャン・モスコニ、ミシェル・トールである。Cercle の委員会メンバーについても変化が生じるのは第8号からである。すなわち、第8号からは第7号までにも編集評議会に名を連ねていたアラン・グロスリシャールとフランソワ・ルグノの2名が Cercle のメンバーとして挙げられるとともに、さらに同号から編集評議会にも名を連ねていたアラン・バディウに加えて、トマ・エルベール、ベルナール・ポトゥラ、ジャン＝マリ・ヴィレジエの3名が、さらに第9号ではパトリック・オシャールとジャック・ナシフ[53]の2名が新たに Cercle の委員会メンバーに加えられることになる。

この変化は時期から考えて、スイユ出版社との提携が *Cahiers* 誌にもたらした変化に

対応していることに間違いはないように思われる。しかし、既に記述した商業的側面に加えてわれわれの注意を惹起するのは、むしろ新たに加わったメンバーの所属である。すなわち、創刊時からのメンバーとして認めることができるのは、ミレール、ミルネール、ルグノー、グロスリシャール、ブヴェレス、トール、マティオ、モスコニの 8 名である。そのうち、グロスリシャール、マティオ、モスコニを除く 5 名は、当時 ENS で「カイマン」を努めていたルイ・アルチュセールの学生、あるいはアルチュセールの『資本論』ゼミナールの参加者である。これらのメンバーの ENS への入学年度も 1960年から 1963年と近い[54]。アルチュセールと関係のない 3 名は、1964年 6 月の時点でパリ・フロイト学会（EFP : École freudienne de Paris）に入会している。そして、ミレールとミルネールは EFP に頻繁に参加していた[55]。ただし、EFP に加わらなかったトールも Cercle の委員会メンバーとして一貫して名を連ねていることは指摘しておかねばならないだろう。いずれにせよ、*Cahiers* 誌の第 7 号までは、これらアルチュセールの学生を中心にして同誌が運営されていたと考えることは充分な蓋然性を持つといえる。第 8 号からはバディウ、デュルー、エルベール[56]、ポトゥラ、ヴィレジエ、以上 5 名が Cercle の委員会メンバーに加わり、第 9 号からはナシフがメンバーに加わっている。これら 6 名のうちで、アルチュセールと関係がなく EFP にのみ関わっているのは、ヴィレジエだけであり、他の 5 名は全員アルチュセールのすなわち ENS の哲学専攻の学生なのである。以上の考察から、*Cahiers* 誌第 8 号以降についても、EFP の影響はあるものの、基本的には同誌が創刊より変わらずアルチュセールの学生を中心として編まれていたと判断することができるだろう。

このように名前を列挙した中でも、創刊時から変わらず Cercle および *Cahiers* 誌の発行に中心的な役割を果たしていたのは、« La Vérité » と題された同誌創刊号から « Le directeur — gérant » として名前が挙げられているジャック＝アラン・ミレールであることに間違いはない。ミレールは、周知の通りジャック・ラカンの精神分析に強く影響を受けたラカン派の精神分析学者で、1966年にラカンの娘婿となったし、ラカンが設立した l'École française de psychanalyse（後の École freudienne de Paris）の精神を継いで L'École de la Cause Freudienne を 1981年に設立した人物である。さらに、ラカンの承認を得て *Le Séminaire* の出版を始めたのもまたミレールであった[57]。そして、ミレールが学部卒業論文を執筆している時にラカンを読むよう勧めたのが、他ならぬアルチュセールだったのである[58]。実際1964年から1965年の年度に、ミレールはアルチュセールが開講していたマルクスの『資本論』講読の授業に出席していた[59]。

Cahiers 誌とアルチュセールを結ぶ証言がもう一つある。創刊当初からのメンバーに名を連ねているジャン＝クロード・ミルネールは、ENS に在籍当時は言語学に興味を持っており、1966年には当時マサチューセッツ工科大学にいたローマン・ヤコブソンの元に、奨学金を得て短期留学をした人物である。ミルネールは、後年のインタビュー

の中でCercleの結成について、ミルネールとルグノーの論文が掲載を予定していた*Cahiers Marxistes-Léninistes*誌（*CML*誌）に掲載するには実験的すぎると考え新たな研究誌を立ち上げたのだ、と*Cahiers*誌創刊の経緯を簡単に述べている[60]。この*CML*誌[61]は、1965年の終わりからルイ・アルチュセールの教え子たち数名によって創刊された雑誌[62]で、« l'Union des étudiants communistes (UEC) »によって配本されていた[63]。しかしこの点に関して、パリにおける1968年5月前後の学生運動について詳細な記述を著しているアモンとロトマンによると、ミレールが*CML*誌第8号で「文学の権力」を特集しようとしたことに腹を立てたロベール・リナールが発行を妨害したため、ミレールはCercleを結成し*Cahiers*誌を発行した[64]、というエピソードを伝えている。フランソワ・ドスもアモンとロトマンによる記述と同様に、*Cahiers*誌と*CML*誌の間で活潑な議論が交わされた可能性を示唆している。すなわち、ドスは*CML*誌の編集責任者でUnion des Jeunesses Communistes Marxistes-Léninistes (UJCML)[65]の発起人の一人であったとされるドミニク・ルクール教授（パリ第7大学）へインタビューを行い、*CML*誌から離反したミレールとミルネールらが*Cahiers*誌を設立したとの証言[66]を伝えているのである。

しかし、当事者であったアルチュセール自身は自伝の中で、1965年の*Lire « Le Capital »*の出版に関連して、ミレールとジャック・ランシエールの間に起こった次のようなエピソードを回想している。すなわち、1963年の1月にピエール・マシュレ、エチエンヌ・バリバール、フランソワ・ルグノーの3人がマルクスの青年期の作品を読みたいので手助けをして欲しいとの要望を受けるが、このことをきっかけとしてアルチュセールは授業でマルクスを取り上げることとなる。さらに翌1964年の6月からゼミナールで『資本論』を読むことになり、そのときはミレールが一番熱心であった。ゼミナールの参加者は、1965年の夏のヴァカンスを『資本論』に当てることになっていたが、休暇が明けてゼミナールを再開してみると一番進歩を見せたのはランシエールだった。アルチュセール自身ランシエールなしにはゼミナールは成功しなかっただろうと述べている[67]。ところで、アルチュセールが行ったラカンについての授業の後でミレールは、「メトニミー的因果関係」という「概念的発見」をしたとアルチュセールに報告していた[68]。そして新学期になってランシエールが行った『資本論』についてのゼミナールでの発表の中に、まさにこの「メトニミー的因果関係」ということばをミレールが見つけ、ランシエールが自分の概念を盗用したと批判し始め、最後にはアルチュセールが盗んだと批判するまでに至ったというのである[69]。このアルチュセールの証言からは、アルチュセールの『資本論』ゼミナールで主導的地位を失ったことに嫉妬したミレールが、アルチュセールのグループから次第に距離を置き、ラカンに対する関心を増していったと考えることもできるだろう[70]。

二つの*Cahiers*の間でどのようなやりとりが行われたにせよ、あるいはアルチュセー

ルが証言するようにミレールの功名心と嫉妬心の賜物であったにせよ、*Cahiers* 誌第 6 号では、Comission Paritaire への登録代表者としてミレールの名が挙げられているのであり、Cercle および *Cahiers* 誌の実質的な運営責任者がミレールであったことに間違いはないのである。そして前述したように、そのミレールを精神分析へと向かわせるきっかけを作ったのがアルチュセールだったのである。以上のように、研究誌の発行にかかわる人の動きを考察することで、*Cahiers* 誌がアルチュセールの思想的影響を基盤にして生まれた研究誌だということを確認することができる。

ところで、ルイ・アルチュセールは、ジョルジュ・ギュスドルフ[71]がストラスブール大学へ異動となった1948年に、アグレガシオン試験を筆記試験で首席、口述試験後の全体結果で 2 位という結果で終えた。この筆記試験の終了後には既に、翌1949年から ENS の執行部から内々に打診されていたのが、哲学専攻の「カイマン caïman」という職であった。カイマンという「教授資格者にして復習教師というポストは、大抵は、学位論文を書き終えてから大学に職をうるまでの間にある待機または腰掛けのポスト」[72]であって、各専門ごとに 1 名しか置かれていない。その職掌は、ENS において大学文系課程を選択した学生が専門を決定する際の相談役であり、アグレガシオンに準備するための授業を行ったり、大学などから講師を招聘し連続講演会や特別講演会のお膳立てをしたりすることだったようである。しかし、ENS では職務規程が文書化されていないため、カイマンの職掌についても ENS の内部で定められたものであり、実際の職務内容はカイマン毎に違っていた可能性もある[73]。さらにアルチュセールは着任後「32 年間も変わらず受け継がれることになる技術を考案した。学年はじめに新入り（すなわち入学者）を集め、哲学専攻希望者には、前期のうちに小論文を提出するように命じるのである。間に挟んだ紙に丹念に添削したうえで、個人面談の折に返し、選択した哲学の道にこのまま進んでいくかどうかを話し合って決める。この面談のあと、場合によっては、ENS または、主としてソルボンヌだが、大学でとるべき講義、そして DES 論文指導の教官について忠告をする。その後は、制度的には、哲学の学生は教授資格試験の準備の年になるまでカイマンとの接触はないが、該当年になると頻繁に会うようになる。ときには、講義に出て、教授資格試験の論文についての発表もする。あとは人間関係の問題であったり、学生の側からの要望があるかどうかの問題であったりする」[74]。アルチュセールの場合はさらに、前任者のギュスドルフを引き継いで、1950年から文系校の « Secrétaire » 職の兼担を命じられている。この職は、ENS 内のさまざまな学術会議や学科会議における決定に立ち会い、決定権は有していないものの、文字通りの書記として管理者と学生の橋渡し役となっていた。守秘義務を課せられてはいるが、「ENS の運営管理の実態、計画中の工事、学生の就学問題、大学改革、入学試験の方式の見直し、caïmans、職員、学長の人事異動、服務規定の問題など」[75]を知りうるポストであった。このように、アルチュセールの学生への影響力は、単に哲学的・学問的なものにとどま

らず学生にとってはENSでの生活全般にまで及ぶものだったのである。そして1946年の秋にENSに入学したフーコーとアルチュセールとの関係は1940年代の後半には始まっている[76)]。

アルチュセールの *Cahiers* 誌との関係について見ると、確かに同誌に掲載された論文は1編にとどまっている[77)]。しかし、創刊号の « Avertissement » においてミレールは「ルイ・アルチュセールがそれに認めた射程と今日それがある状態とを考慮するならば、この研究は何よりも、疑念の余地なく、弁証法的唯物論にとって重要である」[78)]と名前を挙げ、同誌創刊に関わるアルチュセールの重要性を強調している。こうしたミレールの態度表明は、概念盗用問題があったとはいえ、「1965年初旬にENSで開催された『資本論』研究ゼミナールにおいて発表されたもの」[79)]をまとめて1965年に2分冊で出版した *Lire le Capital* や「1960年から1964年までに、フランス共産党の評論誌に論文として発表されたもの」[80)]を集めた *Pour Marx* において、ガストン・バシュラールの提示した「認識論的断絶」から着想を得て、若きマルクスをヘーゲル的なヒューマニズムから引き離し、『資本論』におけるマルクスの科学性を主張したアルチュセールの影響を示すものである。特に *Pour Marx* 発表後のアルチュセールは、言述 discours の性質と哲学・科学・イデオロギーの概念的関連性について関心を強めており、*Cahiers* 誌に掲載された論文も当時のアルチュセールの関心の在処を反映し、ルソーの『社会契約論』についての論考であった。

3．*Cahiers* 誌の掲載内容とジャック・ラカン

Cercle のメンバーおよび *Cahiers* 誌が、アルチュセールの思想から強い影響を受けていることが事実であるとしても、研究誌を主宰し Cercle を率いていたミレールが、精神分析とりわけジャック・ラカンに対して高い関心を寄せていたことも、既に確認したとおりまた事実である。そしてそのことは、同誌が組んだ特集の内容や掲載されたテクストの内容からも確認することができる。

Cahiers 誌では、各号に « Avertissement » という巻頭の辞が掲載されることが慣例化しているが、例えば、第1号の冒頭に付された « Avertissement » の中でミレールは、研究グループの関心が「未刊、既刊を問わず、論理学、言語学、精神分析およびあらゆる分析科学に関わるテクストを掲載するつもりであり、それによって言述の理論を構築することに寄与することを目的としている」と述べている[81)]。しかしミレールの « Avertissement » が「あらゆる分析科学」を対象とすると明言しているのとは裏腹に、1966年に出された5号のうち第2・3・5号はタイトルからも明らかなように同誌の精神分析に対する高い関心を窺わせている。また創刊号についてもその冒頭に掲載されているのはラカンの « la Science et la vérité » と題された講義録[82)]であって、創刊から5号

のうち 4 号が精神分析に関わるテクストを中心に編まれていることを認めることができる。創刊号ではさらに、ENS におけるラカンのセミナー 3 回分の抄録が掲載されているほか[83]、第 3 号でパリ大学文学部の学生グループがラカンに宛てた質問状に対するラカンの回答[84]が掲載され、1965年12月21日のラカンのセミナーの報告[85]も掲載されている。

しかし何よりも同誌が、1965年から1967年という短い期間ではあるが、ENS で行われた精神分析関連のセミナーの講義録を掲載している[86]ことを忘れてはならない。これらの講義録のすべては、Cercle の創設以来のメンバーの 1 人で、後にラカンの最初の弟子の 1 人となったセルジュ・ルクレールの監修の下にまとめられている[87]。またラカンの講義が収められていた *Cahiers* 誌第 1 号では、1965年11月17日および同年12月 1 日と15日の 3 回に渉って ENS で開催されたセルジュ・ルクレールの講演[88]が、また第 3 号では1966年に開催されたセミナー 2 回分[89]が質疑応答を含めて再録され、さらには第 8 号においても、1966年から1977年に開かれたセミナーから 7 回分の抄録[90]がテクスト化されているのである。このように *Cahiers* 誌の発行されたすべての号に渉って、ラカン派の精神分析に関わるテクストが多く掲載されていることが確認できる。

このようにラカン派の精神分析に対する圧倒的な傾倒を示す一方で、*Cahiers* 誌の掲載内容を精査するとき、同誌が精神分析以外の分野に対しても幅広い興味を示していることも確認することができる。例えば、第 4 号ではクロード＝レヴィ・ストロースを取り上げ、文化人類学や社会学への関心を示している。特に第 4 号については、Cercle のメンバーによって執筆され巻頭に付されていた « Avertissement » はジャック・デリダによって執筆され[91]、デリダ自身の « Nature, Culture, Écriture (la violence de la lettre de Lévi-Strauss à Rousseau) » と題する論文を掲載している[92]。また、第 6 号ではマキアヴェリのテクスト[93]を問題提起の中心に据えてデカルト[94]やヒューム[95]のテクストを再録し、政治学の特集を組んでいる。さらに第 4 号で示された社会科学分野への関心は、« Du Mythe au roman » と題された第 7 号に引き継がれているのであり、比較神話学を構築し初期の構造主義に影響を与えたジョルジュ・デュメジルの論文が巻頭を飾る[96]。

とはいえ *Cahiers* 誌発行の全期間にわたって確認することができる掲載内容の幅広さにもかかわらず、前述したスイユ出版社が *Cahiers* 誌に及ぼした変化の影響を確認することができることもまた事実である。すなわち、創刊以来同誌に中心的に掲載されていた講義・講演録や翻訳原稿の類は、第 8 号以降次第に掲載されなくなりその代わりに書き下ろし原稿の割合が高くなる[97]。第 8 号以降の掲載テクストについて具体的に確認してみると、第 8 号では、ジャン＝ジャック・ルソーの特集を組む一方で、デリダが同論文で行ったレヴィ＝ストロース批判に対する反論を公にしており[98]、後年繰り返されるデリダ／レヴィ＝ストロース論争の最初の火種を認めることができるのである。さらに、第 9 号はフーコーへの質問状に始まる構造主義的研究にバシュラール[99]やダラン

ベール[100]の自然科学に関わるテクストを収めて主に化学に関するテクストを掲載している。そして、最終号となる第10号では、イギリスの数学者ジョージ・ブール[101]やバートランド・ラッセル[102]、チェコの論理学者クルト・ゲーデル[103]の論文を含めて、論理学に関するテクストを集めているのである。以上のように *Cahiers* 誌の興味関心の在処の多彩さを再確認するとき、ミレールが創刊号において「あらゆる分析科学に関わるテクストを掲載する」とした宣言が果たされていると考えることもできるだろう。しかし、第 8 号以降の *Cahiers* 誌の発行に関して、スイユ出版社の介在の影響をまったく無視することができないのは、同誌の掲載内容についてもこれまでの考察と同様なのである。

とはいえ、スイユ出版社の介在によって同誌に変化が生じた第 8 号以降についても、創刊号から第 7 号までの時期と同様に、ラカン派の精神分析に対する関心を同誌が捨ててしまい、商業主義に改宗してしまったわけではもちろんない。1965–1966年度に ENS で開催されたセルジュ・ルクレールによるゼミナールの講義録を掲載したのは、1966年5–6月号の第 3 号においてであったが、この企画は第 8 号でも継続され、1966–1967年度に ENS で開催されたルクレールの精神分析ゼミナール 6 回分が講義録の形式で掲載されているのは先に触れたとおりである[104]。また第 9 号では、われわれの最終的な関心である Cercle によるフーコーへの質問書とそれに対する回答書が « Archéologie des Sciences » という章題のもとに掲載されているのだが、それに続いて « Idéal de la science » という章題のもとに、Cercle のメンバーの原稿が一挙 8 編掲載されている。それらの中には、ミレールの « Action de Structure » と題された論考が含まれている。このテクストは、ミレールをはじめとする ENS の学生がラカンが主宰し精神分析家ではない人々にも門戸を開放して1964年に設立したパリ・フロイト学派（EFP）に加入する際に、言述の理論という彼らの関心事を表明するためにまとめたものである。このテクストはフロイト学派の年報に掲載されるはずだったが、掲載されないままになっていたものを *Cahiers* 誌に載録された[105]。ところが、第10号になると、Cercle メンバーを含めた書き下ろし原稿の掲載はわずかに 4 編[106]となったうえに、純粋に精神分析に関わる論文は姿を消してしまうのである。とはいえ、第 8 号以降も *Cahiers* 誌が精神分析を、重要なコンテンツと位置づけていたことは間違いないのである。

こうした *Cahiers* 誌からラカンおよびラカン派の精神分析に対して注がれた関心を考える時に忘れてはならないのが、アルチュセールの存在である。というのも、ラカンを ENS に招いて連続講演を企画したのは他ならぬアルチュセールだったからである[107]。フランスの精神分析学会は、1963年まではフランス精神分析学会 (SFP : Société française de Psychanalyse) だけであったが、1963年から1964年にかけて、ラカンが主宰するパリ・フロイト学派とフランス精神分析協会（APF : Association psychanalytique de France）の２つに分裂してしまう。ENS でのゼミナールに関連して名前の挙がったセルジュ・ル

クレールは、フランス精神分析第3世代を代表する人物[108]で、1969年にパリ第8「実験」大学ヴァンセンヌ校で心理学講座を創設した人物であるが[109]、国際精神分析学会（IPA : International Psychoanalytical Association）の承認に関連して、ルクレールは同世代のグラノフと共にラカンからIPAと黙って交渉をしたと非難される。しかしその後もラカンとルクレールの関係は続き、1964年の夏には二人はEFPの会則の作成を一緒に行う[110]など、精神分析界をはじめとする他の機関との軋轢が大きかったラカンのEFPを、何とか世に認めさせようと骨折っていた。SFPの分裂という事態に際して、ラカンは自らアルチュセールへ手紙をしたため、ENSでの招聘講演を企画するよう要望している[111]。こうしてラカンの求めに応じて、1964年1月21日からENSのサル・デュケーヌでラカンのゼミナールが始まる[112]。

ドスが*Cahiers*誌を「アルチュセール＝ラカンの雑誌」と形容するのはまさにこうした背景からであり、すなわち、*Cahiers*誌はENSでアルチュセールのマルクス論を受講し、思想的にも当時のマルクス＝レーニン主義に近かったグループが、1964年に開講されたラカンおよびラカン派の精神分析家によるENSでのゼミナール[113]を記録しようと始めた研究誌だったということができるのである。しかし、アルチュセールとラカンの融合は結果として十全に果たされていたわけではなかった。ラカンの最初のゼミナールについてアルチュセールは、フロイト的概念をラカンが構造言語学や反心理主義に依拠しながらラカンが如何にして引き継いできたかに力点を置いて、参加した学生たちに説明しようとしたが、ミレールはラカンの関心が、ローマン・ヤコブソン、エミール・バンヴェニスト、フェルディナン・ド・ソシュールに依拠しつつフロイトへの回帰に移っていたことを知っていたと、ルディネスコはラカン伝の中で伝えているのである[114]。

結論に代えて

本稿での考察は、エピテクストとテクストとのパラテクスト性に関連して、通時的な視座にたった考察を展開することによって、エピテクストの創造性を明らかにするための、予備的考察と位置づけることができる。すなわち、フーコーの*les Mots et les Choses*から*Archéologie*までを対象とすることで通時的な観点での考察を主眼としつつ、それら2つのテクストのエピテクストとして*Cahiers*誌に掲載されたフーコーへの2通の質問状とその回答書を設定し、*les Mots et les Choses*から同誌を経て*Archéologie*に至るフーコーの思考の変遷を跡付けることで、エピテクストがフーコーの思考の変遷にどのような影響を与えたのかを確認することができるのである。

ところで、本稿において、*Cahiers*誌がルイ・アルチュセールおよびジャク・ラカンに直接つながる雑誌であること、特にフーコーが言及するテクストが掲載された第9号は、スイユ出版社の介入により、同誌が精神分析にとどまらずさまざまな分析科学へと

その関心をひろげ、Cercle の標榜する「言述の理論の構築」へと向かう姿勢を鮮明にしていることを確認した。*Cahiers* 誌に寄稿するということは、単に知己を得ていた人物からの依頼を引き受けるという意味を持つだけではない。*Cahiers* 誌の「言述の理論の構築」という名目は、フーコーが同誌に寄せたテクストに一つの条件として課されている。

本稿の考察が目的に対して大きな迂回路であるとの批判を甘受する用意はある。しかしながらこの迂回路は、エピテクストの創造性を詳細に分析するために必要不可欠な経路であると考える。エピテクストとテクストとの関係性は、エピテクストが構成する空間が帯びている性質の記述を要求しているし、そうした要求こそがジュネットがエピテクストの上位区分としてのパラテクスト分析のタイトルとして「*Seuils* 閾」ということばを用いていることを正当化するように思われる。すなわち、それは変化が生じる臨界点であり、二つの異なる世界、状態、テクスト等々を結ぶインターフェースなのである。われわれがテクストを知るのは、インタフェースというフィルタを通してであり、そのフィルタによる歪曲あるいは変形を通してのみ、われわれはテクストを与えられたものとして見なしているのである。

本稿の考察をもとにして、フーコーの質問状を 2 つのテクストに結びつけることが、われわれの次なる課題となるだろう。*Cahiers* 誌というインターフェースの性質についての予備的考察に *Esprit* 誌というエピテクストについての考察を加えることで、*Les Mots et les Choses* から *Archéologie* へと至るフーコーの思考の変遷について、われわれの分析を本当に始めることができると考えている。

注

1）Gérard Genette, *Palimpsestes*, coll. « points / essais », Éditions du Seuil, 1982.

2）« transtextualité » の訳語としては「相互テクスト性」が用いられているが、本稿では 5 つのテクスト性を包摂する概念であることに鑑み「テクスト関係性」を用いる。また、用語自体は *Introduction à l'architexte* で既に提案されている：« Mais il est de fait que *pour l'instant* le texte (ne) m'intéresse (que) par sa *transcendance textuelle*, savoir tout ce qui le met en relation, manifeste ou secrète, avec d'autres textes. J'appelle cela la *transtextualité*, […]. » (Gérard Genette, *Introduction à l'architexte*, coll. « Poétique », Éditions du Seuil, 1979, p. 87)

3）Cf. G. Genette, *op. cit.*, pp. 7–16.

4）G. Genette, *ibid.*, p. 16 : « J'appelle donc hypertexte tout texte dérivé d'un texte antérieur par transformation simple (nous dirons désormais *transformation* tout court) ou par transformation indirecte : nous dirons *imitation*. »

5）G. Genette, *Introduction à l'architexte*, p. 87 : « […] : j'y mets encore d'autres sortes de relations — pour l'essentiel, je pense, d'imitation et de transformation, dont le pastiche et la parodie peuvent donner une idée, ou plutôt deux idées, fort différentes quoique trop souvent confondues, ou inexactement distinguées — que je baptiserai faute de mieux *paratextualité* (mais c'est aussi pour moi la transtextualité par excellence), et dont nous nous occuperons peut-être un jour, si le hasard fait que la Providence y consente. » ; G. Genette,

Palimpsestes, p. 7 : « L'objet de ce travail est ce que j'appelais ailleurs "faute de mieux", *la paratextualité*. »

6）G. Genette, *op. cit.*, p. 10 : « Le second type est constitué par la relation, généralement moins explicite et plus distante, que, dans l'ensemble formé par une œuvre littéraire, le texte proprement dit entretient avec ce que l'on ne peut guère nommer que son *paratexte* : titre, sous-titre, intertitres ; préfaces, post-faces, avertissement, avant-propos, etc. ; notes marginales, infrapaginales, terminales ; épigraphes ; illustrations ; prière d'insérer, bande, jaquette, et bien d'autres types de signaux accessoires, autographes ou allographes, qui procurent au texte un entourage (variable) et parfois un commentaire, officiel ou officieux, dont le lecteur le plus puriste et le moins porté à l'érudition externe ne peut pas toujours disposer aussi facilement qu'il le voudrait et le prétend. »

7）Gérard Genette, *Seuils*, coll. « points / essais », Éditions du Seuil, 1989.

8）テクスト関係性についてのジュネットの考察は、関係性を扱いながらもテクスト自体を語る点で、用語の使用にジュネット自身が混乱を持ち込んでいるように思われる。

9）G. Genette, *ibid*., p. 11 : « Comme il doit désormais aller en soi, péritexte et épitexte se partagent exhaustivement et sans rete le champ spatial du paratexte ; autrement dit, pour les amateurs de formules, *paratexte = péritexte + épitexte*. »

10）G. Genette, *ibid*., p. 11 : « […] : autour du texte, dans l'espace du même volume, comme le titre ou la préface, et parfois inséré dans les interstices du texte, comme les titres de chapitres ou certaines notes ; j'appellerai péritexte. cette première catégorie spatiale, certainement la plus typique, […]. »

11）G. Genette, ibid., p. 11 : « Autour du texte encore, mais à distance plus respectueuse (ou plus prudente), tous les messages qui se situent, au moins à l'origine, à l'extérieur du livre : généralement sur un support médiatique (interviews, entretiens), ou sous le couvert d'une communication privée (correspondances, journaux intimes, et autres). »

12）Michel Foucault, *les Mots et les Choses — une archéologie des sciences humaines*, coll. « Bibliothèque des Sciences humaines », Éditions Gallimard, 1966.

13）Michel Foucault, *L'Archéologie du Savoir*, coll. « Bibliothèque des sciences humaines », Éditions Gallimard, 1969.

14）アンナ・ボスケッティは「知識人界 champ intellectuel」ということばを用いていわゆる「サルトル現象」を右と左の論争的二者択一に陥ることなく文化社会学的に考察している：« La représentation du champ intellectuel et de son fonctionnement que propose Bourdieu permet de dépasser l'alternative polémique entre la droite et la gauche à laquelle semble vouée la sociologie des intellectuels quand elle affronte ces thèmes. » (Anna Boschetti, *Sartre et « les Temps Modernes »*, coll. « le sens commun », Éditions de Minuit, 1985, p. 11) この引用からも分かるように、ボスケッティが依拠する「界 champ」の概念自体はピエール・ブルデューに由来する。

15）« Michel Foucault. *Les Mots et les Choses* » (entretien avec R. Bellour), *Les Lettres françaises*, nº 1125, 31 mars-avril 1966, pp. 3–4, repris dans Michel Foucault, *Dits et écrits I, 1954–1975*, édition établie sous la direction de Daniel Defert et François Ewald avec la collaboration de Jacques Lagrange, 1994 (éd. de 2001), pp. 526–532.

16）« Entretien avec Madeleine Chapsal », *La Quinzaine littéraire*, nº 5, 16 mai 1966, pp. 14–15 ; repris *ibid.*, pp. 541–546.

17）« Michel Foucault et Gilles Deleuze veulent rendre à Nietzsche son vrai visage » (entretien avec C. Jannoud), *Le Figaro littéraire*, nº 1065, 15 septembre 1966, p. 7 ; repris dans *ibid.*, pp. 577–580.

18）« Che cos'è Lei Professor Foucault ? », *La Fiera letteraria*, année XLII, nº 39, 28 septembre 1967, pp. 11–15 ; repris *ibid*., pp. 629–648.

19）« En intervju med Michel Foucault », *Bonniers Litteräre Magasin*, Stockholm, 37e année, nº 3, mars 1968,

pp. 203–211 ; repris *ibid.*, pp. 679–690.

20）« Foucault répond à Sartre », *La Quinzaine littéraire*, nº 46, 1er–15 mars 1968, pp. 20–22 ; *ibid.*, pp. 690–696. このインタビューについては、サルトルと自らの政党加入歴についての言及が掲載されたことに関して、編集部にあらためて手紙を送付し、翌47号にその手紙が掲載されている。« Une mise au point de Michel Foucault », *La Quinzaine littéraire*, nº 47, 15–31 mars 1968, p. 21 ; reprise *ibid.*, pp. 697–698. フーコーが同誌に抗議した主たる箇所は次の発言と思われる：« Je vous répondrai deux choses. Premièrement, Sartre est un homme qui a une œuvre trop importante à accomplir, œuvre littéraire, philosophique, politique, pour qu'il ait eu le temps de lire mon livre. Il ne l'a pas lu. Par conséquent, ce qu'il en dit ne peut pas me paraître très pertinent. Deuxièmement, je vais vous faire un aveu. J'ai été au Parti communiste autre fois, oh ! pour quelques mois, ou un peu plus que quelques mois, et je sais qu'à ce moment-là Sartre était défini par nous comme le dernier remprat de l'impérialisme bourgeois, la dernière pierre de l'édifice par lequel, etc., bon, cette phrase, je la retrouve avec un étonnement amusé, quinze ans après, sous la plume de Sartre. Disons que nous avons tourné autour du même axe, lui et moi. » (*ibid.*, p. 694.) フーコーの伝記を著したデヴィッド・メイシーは、フーコーがフランス共産党に入党していたのは「数ヶ月」ではなく、1950年から1953年頃までの期間だとしている（cf. Davide Macey, *Michel Foucault*, traduit de l'anglais par Pierre-Emmanuel Dauzat, coll. « Biographies », Éditions Gallimard, 1994, pp. 60–64）。

21）« Lettre de Michel Foucault à Jacques Proust », *La Pensée*, nº 139, mai-juin 1968, pp. 114–117 ; repris *ibid.*, pp. 698–701.

22）例えば、*Histoire de la folie à l'âge classique* の最初の版が Plon より1961年に出版された際には、*Le Monde* 紙に1件インタビューが掲載されただけであるし（« la folie n'existe que dans une société » (entretien avec J.-P. Weber), *Le Monde*, nº 5135, 22 juillet 1961, p. 9 ; repris *ibid.*, pp. 195–197.）、*Naissance de la clinique* が1963年に Presse Universitaire de France から出版された際にはインタビューは行われていない。

23）実際にはこのフーコーの見解こそが、後述する *Les Temps moderne* 世代の哲学者たちとの距離を如実に表しているといえよう。

24）« Michel Foucault. *Les Mots et les Choses* », *ibid.*, p. 529. あるいはピエール・クロソウスキーの翻訳により1967年にガリマール社から出版された『ニーチェ哲学全集』(Friedrich Nietzsche, *Œuvres philosophiques complètes*, [Introduction générale par Gilles Deleuze et Michel Foucault.], Texte et variantes établis par G. Colli et M. Montinari, traduits de l'allemand par Pierre Klossowski, Gallimard, 1967) でフーコーとドゥルーズは序文を担当しているが、その出版に際して行われた *Le Figaro littéraire* 誌のインタビューでも同様の質問が出されている：« — *Nous en revenons à votre livre* Les Mots et les Choses, *où vous vous insurgez contre cette tradition [cartésienne]*. » (« Michel Foucault et Gilles Deleuze veulent rendre à Nietzsche son vrai visage », *ibid.*, p. 580.)『ニーチェ哲学全集』への序文については、次を参照のこと：« Introduction générale » (avec G. Deleuze) aux *Œuvres philosophiques complètes* de F. Nietzsche, Paris, Gallimard, 1967, t. V : *Le Gai Savoir. Fragments posthumes (1881–1882)*, hors-texte, pp. I–IV ; reprise *ibid.*, pp. 589–592.

25）« Si le structuraliste ne se sent pas utile, le structuralisme peut-il l'être ? » (« En intervju med Michel Foucault », *ibid.*, p. 680.)

26）« — *On retrouve, dans le sous-titre que vous avez donné au livre, ce mot d'« archéologie » qui figurait déjà en sous-titre à* Naissance de la clinique, *et qui apparaissait déjà dans la préface de l'*Histoire de la folie. » (« Michel Foucault. *Les Mots et les Choses* », *ibid.*, p. 526.) ; « — *Mais ce travail d'excavation, cette « archéologie » est aussi un travail d'histoire*. » (« Che cos'è Lei Professor Foucault ? », *ibid.*, p. 634.) この引用でも確認することができるように、しばしば « archéologie » と « histoire » とを一対にした質問になっている。

27）« Entretien avec Madeleine Chapsal », *ibid.*, p. 541 : « *Votre dernier livre,* Les Mots et les Choses*, tente l'examen de ce qui a totalement changé, depuis vingt ans, dans le domaine de la pensée. L'existentialisme et la pensée de Sartre, par exemple, sont, d'après vous, en train de devenir des objets de musée. Vous vivez — et nous vivons sans encore nous en apercevoir — dans un espace intellectuel totalement renouvelé.* »

28）« *— Revenons ainsi au thème qui vous est cher, celui de la disparition de sujet-homme et de toute forme d'humanisme. Je voudrais que vous m'expliquiez mieux la portée de vos deux thèses. Pour commencer, vous avez parlé d'« humanismes mous » (ceux de Saint-Exupéry, de Camus) pour désigner ces humanistes qui vous paraissent particulièrement répugnants : dois-je alors en déduire qu'il existe même pour vous des humanismes dignes de respect ?* » (« Che cos'è Lei Professor Foucault ? », *ibid.*, p. 643.) « humanisme » は周知のようにサルトルが1945年に発表した « L'Existentialisme est un humanisme » の題名にもあるように、*Les Temps modernes* 世代の哲学者たちの重要な用語であることは論を待たない。

29）« *Je fais surtout allusion aux positions exprimées dans le livre paru l'an dernier,* Les Mots et les Choses*, grâce auquel vous êtes devenu un personnage public, et pas seulement en France.* », *ibid.*, p. 629.

30）Michel Foucault, *L'Archéologie du Savoir*, pp. 26–27.

31）« En particulier les premières pages de ce texte ont constitué, sous une forme un peu différente, une réponse aux questions formulées par le *Cercle d'Épistémologie* de l'E.N.S. (cf. Cahiers pour l'Analyse, nº 9). D'autre part une esquisse de certains développements a été donnée en réponse aux lecteurs d'*Esprit* (avril 1968). » (*ibid.*, p. 27). *Esprit* 誌についてフーコーは「4月」としているが、実際に掲載されたのは5月号である。

32）Le Cercle d'épistémologie, « Sur l'archéologie des sciences à Michel Foucault », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 9, le Cercle d'épistémologie, l'École Normale Supérieure à Paris, 1968, pp. 5–8.

33）M. Foucault, « Réponse au Cercle d'épistémologie », *ibid.*, pp. 9–40. Cercle は *Cahiers* 誌第9号に質問状とそれに対するフーコーの回答を掲載しているだけではなく、フーコーの回答の後に「新たな質問」も掲載している。(Cf. le Cercle d'épistémologie, « Nouvelles questions », *ibid.*, pp. 41–44).

34）Michel Foucault, « Réponse à une question », dans *Esprit*, nº 371, 36e année, mai 1968, pp. 850–874.

35）Le Cercle d'epistémologie, *Cahiers pour l'Analyse*, Le Graphe [Bibliothèque de l'Arsenal : 8º Jo. 23645]。ただし Bibliothèque de l'Arsenal 所蔵の同誌は、全10号が箱に収められているものの、第1号と第2号は合併号として再発行された第3版であるし、第3号が第5版、第4号が第2版であることを付け加えておく必要があるかもしれない。

Cahiers pour l'Analyse 誌についてはイギリス・Middlesex 大学が開設している Web サイトがあり、そこで全10号に収められているテクストを閲覧することができる：http://www.web.mdx.ac.uk/cahiers/。ただし Web で閲覧することができるのは、残念ながらすべてのテクストではない。例えば、同誌第5号には、精神病を患っていたドイツ判事のダニエル＝パウル・シュレーバーの回想録でフロイトが解釈を施したことで知られる *Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken* (1903)（『ある神経病者の回想録』、渡辺哲夫訳、筑摩書房、1990年）が、« Mémoires d'un névropathe avec des compléments et un appendice sur la question : "A quelles conditions une personne considérée comme malade mentale peut-elle être maintenue dans un asile contre sa volonté déclarée ?" » の題名でジャック・ラカンの紹介文とともにポール・デュケンヌの翻訳で断片的に訳出され、第7号までの3号に渉って連載されているが、このテクストは掲載の事実自体が、同 Web サイトでは省略されている。Cf. Daniel-Paul Schreber, « Mémoires d'un névropathe avec des compléments et un appendice sur la question : "A quelles conditions une personne considérée comme malade mentale peut-elle être maintenue dans un asile contre sa volonté déclarée ?" », traduits par Paul Duquenne avec une présentation de Jacques Lacan, dans *Cahiers pour l'Analyse*, nº 5, novembre–décembre, 1966, pp. 65–116 ; nº 6, janvier-février, 1967, pp. 139–152 ; nº 7, mars-avril, 1967, pp. 97–121.

36）« LES CAHIERS POUR L'ANALYSE sont publiés par la Société du Graphe, imprimés et diffusés par les Editions du Seuil, 27, rue Jacob — Paris 6è. » (*Ibid.*, nº 8, octobre, 1967, p. ii)

37）« Revue trimestrielle paraît depuis janvier 1966 » (*Cahiers pour l'analyse*, nº 8, hivers 1967, deuxième page non-paginée.)

38）« LES CAHIERS POUR L"ANALYSE sont édités par "LE GRAPHE"
Imprimerie Copédith, 70, rue de Flandre — Paris XIXè » (*loc. cit.*)
« LES CAHIERS POUR L'ANALYSE sont publiés par la Société du Graphe, imprimés et diffusés par les Editions du Seuil, 27, rue Jacob — Paris 6è. » (*op. cit.*, nº 8, p. ii)
印刷については、最終となる第10号において再度変更されている：« IMPRIMERIE BUSSIÈRE A SAINT-AMAND. D. L. 1e TR. 1969. Nº 2290. (2936) », *op. cit.*, nº 10, au plat verso.

39）*Op. cit.*, nº 7, mars-avril, 1967, p. 124.

40）*Op. cit.*, nº 5, novembre–décembre, 1966, p. 119 :
« 1 : LA VERITE (épuisé)
2. – QU'EST-CE QUE LA PSYCHOLOGIE ? – (épuisé)
3 : SUR L'OBJET DE LA PSYCHANALYSE (2ème édition)
4 : LEVI-STRAUSS DANS LE XVIIIè SIECLE [sans mentions] »

41）« Bulletin de commande », inséré dans *ibid*., nº 1 et 2 :

« le nº 3 : "Sur l'objet de la psychanalyse["] (5ème édition)	au prix de 6 F.
le nº 4 : "Lévi-Strauss das le XVIIIe siècle["] (3 ème édition)	au prix de 6 F.
le nº 5 : "Ponctuation de Freud" (3ème édition)	au prix de 6 F.
le nº 6 : "La politique des philosophes" (3ème édition)	au prix de 6 F.
le nº 7 : "Du mythe au roman" (3ème édition)	au prix de 6 F.
le nº 8 : "L'impensé de J.-J. Rousseau" (Octobre 1967)	au prix de 6 F. »

42）Bibliothèque de l'Arsenal 所蔵の第 3 号が第 5 版。最終的にいくつの版が発行され、各版が何部発行されたかについての詳細は不明である。

43）« Publier des ouvrages qui permettent de comprendre notre temps et d'imaginer ce que le monde doit devenir. », au site Web des Éditions du Seuil [http://www.seuil.com/presentation.php : accès au 4 février 2011]

44）スイユ出版社の歴史については、前述の同社 Web サイトおよび次を参考にした：Hervé Serry, *Les Éditions du Seuil. 70ans d'histories*, Éditions du Seuil, 2008.

45）*Op. cit.*, nº 5, p. 120 :
« LES CAHIERS POUR L'ANALYSE PUBLIERONT :

. Louis Althusser (Sur "Le Contrat Social")
. Alain Badiou (sur le zéro de Frege)
. Etienne Balibar
. Antoine Culioli (sur la formalisation des langues naturelles)
. Alain Grosrichard (sur l'Homme-Machine)
. Jacques Lacan (sur Schreber)
. Pierre Macherey
. Jean Mathiot (sur "Léviathan")
. Jacques-Alain Miller (sur Marx)
. Jean-Claude Milner (sur "la mise à mort")
. François Regnault (sur Gombrowicz)
. Jean-Marie Villégier

et

D.P. SCHREBER :
La suite des “Mémoires” traduits par Paul Duquenne

FREUD :
un texte inédit, traduit et présenté par Pierre Kaufmann

GALILEE :
textes choisis et traduits par Jean-Michel Gardair

HUME :
textes choisis et traduits par Bernard Pautrat »

こうした掲載予告は第 7 号においても、第 5 号の情報に若干の変更を確認することができるものの、再度繰り返されている：« Les *Cahier pour l'Analyse* publieront : Louis Althusser, Alain Badiou, Etienne Balibar, Jacques Bouveresse, Antoine Culioli, Alain Grosrichard, Jacques Lacan, Pierre Macherey, Jean Mathiot, Jacques-Alain Miller, Jean-Claude Milner, François Regnault, Michel Tort, Jean-Marie Villégier, et CANTOR, FREUD, GALILEE, GÖDEL, RUSSELL » (*op. cit.*, nº 7, p. 124.)

46）予告された論文のうち掲載を確認できなかったのは、エチエンヌ・バリバルの論文、ジャック・ラカンのシュレーバーについての考察、ピエール・マシュレの論文、ジャン・マティオの『リヴァイアサン』論、ジャック＝アラン・ミレールのマルクス論、ジャン＝クロード・ミルネの死についての論文、そしてジャン＝マリ・ヴィレジエの論文という 7 本の論文であり、さらにフロイトとガリレイの翻訳については訳出を確認できていない。ヒュームのテクストは、第 6 号に 2 本訳出されている：David Hume, « Des Premiers Principes du gouvernement (1742) », *op. cit.*, nº 6, janvier-février 1967, pp. 75–96 ; David Hume, « De l'Obéissance passive » (1752), *ibid*., pp. 97–99. 一方で、予告された論文で後に掲載されている論文は以下の通り：Louis Althusser, « Sur le *Contrat social* », *op. cit.*, nº 8, octobre 1967, pp. 5–42 ; Alain Badiou, « Marque et manque : à propos du zéro », *op. cit.*, nº 10, hivers 1969, pp. 150–173 ; Antoine Culioli, « la Formalisation en linguistique », *op. cit.*, nº 9, été 1968, pp. 106–117 ; Alain Grosrichard, « Gravité de Rousseau (l'Œuvre en équilibre) », *op. cit.*, nº 8, octobre 1967, pp. 43–64 ; François Regnault, « Optique de Gombrowicz », *op. cit.*, nº 7, mars-avril 1967, pp. 57–70 ; Daniel-Paul Schreber, « Mémoires d'un névropathe avec des compléments et un appendice sur la question : “A quelles conditions une personne considérée comme malade mentale peut-elle être maintenue dans un asile contre sa volonté déclarée ?” », traduits par Paul Duquenne avec une présentation de Jacques Lacan, *op. cit.*, nº 5, novembre–décembre, 1966, pp. 65–116 ; *op. cit.*, nº 6, janvier-février, 1967, pp. 139–152 ; *op. cit.*, nº 7, mars-avril, 1967, pp. 97–121 ; Bernard Pautrat, « Du Sujet politique et des intérêts : Note sur la théorie humainne de l'autorité », *op. cit.*, nº 6, janvier-février 1967, pp. 67–74. ガリレイのテクストについては、ジャン＝ミシェル・ガルデルによる翻訳テクストの掲載は確認できなかったが、代わりに次のテクストが第 9 号に掲載されている：Judith Miller, « Métaphysique de la physique de Galilée », *op. cit.*, nº 9, été 1968, pp. 138–146.

47）*Op. cit.*, nº 10, hivers 1969, p. ii : « Les *Cahiers pour l'Analyse* sont une revue trimestrielle publiée par la Société du Graphe, imprimée et diffusée par les Éditions du Seuil. Le prix de l'abonnement pour quatre numéros (du nº 10 au nº 13) est de 38 francs pour la France et 45 francs pour l'étranger. Les versements sont à effectuer par chèque bancaire, par chèque postal ou par mandat-lettre, à l'ordre des Éditions du Seuil, 27 rue Jacob, Paris 6e, C.C.P : Paris. 3042–04 »

48）« Travailler un concept, c'est en faire varier l'extension et la compréhension, le généraliser par l'incorporation des traits d'exception, l'exporter hors de sa région d'origine, le prendre comme modèle ou

inversement lui chercher un modèle, bref lui conférer progressivement, par des transformation réglées, la fonction d'une forme.

G. Canguilhem »

(*Op. cit.*, nº 3, [à la deuxième page de la couverture non paginée] ; repris de Georges Canguilhem, « III. — Dialectique et philosophie du non chez Gaston Bachelard », in *Études d'histoire et de philosophie des sciences*, J. Vrin, Paris, 1968 (éd de 1979), p. 206.)

49）« Cercle d'Epistémologie Comité : J[ean]-C[laude] Milner (secrétaire), J[acques] Bouveresse, J[ean] Mathiot, J[ean] Mosconi. M[ichel] Tort
Cahiers pour l'Analyse Conseil de rédaction : A[lain] Grosrichard, J[acques]-A[lain] Miller, F[rançois] Regnault ». (*loc. cit.*)

50）« Conseil de Rédaction : A[lain] Grosrichard, J[acques]-A[lain] Miller, J[ean]-C[laude] Milner, F[rançois] Regnault » (*Ibid.*, nº 2, à la deuxième page non paginée)

ミルネールの名前は、第 2 号の « Avertissement » に « Le conseil de Rédaction » の代表という肩書きで掲載されている。

51）Yann Moulier Boutang, « Index raisonné », dans Louis Althusser, *ibid*., p. 547.

52）Cercle の構成メンバーおよび *Cahiers* への寄稿者についても、Middlesex 大学の Web サイトが参考になる。

53）ジャック・ナシフは、ENS の哲学専攻の学生でポール・リクールと博士論文を準備する予定になっていた（cf. Elisabeth Roudinesco, *Jacques Lacan, Esquisse d'une vie, histoire d'un système de pensée*, Librairie Arthème Fayard, 1993, p. 532）。*Freud l'inconscient*, Paris, Galilée, 1977 の著者（cf. Elisabeth Roudinesco, *Histoire de la Psychanalyse en France. 1 1885–1939*, Librairie Arthème Fayard, 1994, p. 442）。EFP の会員で、パリ第 8 実験大学の心理学講座の UER [Unité d'enseignement et de recherche] が初年度に開講した 16 コマのうちの一つを担当している（cf. E. Roudinesco, *op. cit.*, p. 559）また 1970 年には、ラカンのゼミナールの原稿を書き起こすようラカンに依頼され複数年の契約をスイユ出版社と結ぶものの、1 編 *D'un Autre à l'autre* を書き起こしたのみで任を解かれ、1972 年からラカンの『ゼミナール』出版計画は、ミレールが担当している（cf. *Ibid*., p. 532.）。

54）Cercle 委員会メンバーおよび編集評議会に名前連ねた人物の ENS への入学年度は以下の通り（入学年度順）：【アルチュセールの学生】Alain Badiou (Promotion 1956), Thomas Herbert [Michel Pêcheux, *dit*] (Promotion 1959), François Regnault (Promotions 1959), Yves Duroux (Promotion 1960), Jacques Bouveresse (Promotion 1961), Michel Tort (Promotion 1961), Jacques-Alain Miller (Promotion 1962), Bernard Pautrat (Promotion 1962), Jean-Claude Milner (Promotion 1963)；【その他のメンバー】Alain Grosrichard (Promotion 1962). その他以下の人物については入学年の詳細を得ることができなかった。Jean Mosconi (1942 年生), Jean-Marie Villégier (1937 年生、ENS 在学), Jean Mathiot, Jacques Nassif (ENS 在学). アルチュセールの学生の入学年度については以下を参照した：Yann Moulier Boutang, « Index raisonné », dans Louis Althusser, *ibid*., pp. 545–574. その他のメンバーに関しては次の Web サイトを利用した：Alain Grosrichard [http://www.web.mdx.ac.uk/cahiers/names/grosrichard.html], Jean Mosconi [http://www-ihpst.univ-paris1.fr/annuaire/webpage.php?id_fiche=87&langue=fr], Jean-Marie Villégier [http://www.tns.fr/fr/category/2.html?download=9].

55）Roudinesco, *Histoire de la Psychanalyse en France. 2*, p. 391.

56）ルディネスコによれば、トマ・エルベールとは、カンギイェームと現代言語学の融合の可能性を見て、共産主義が席巻する大学の内部から心理学を批判しようとしていたアルチュセールの学生の 1 人、ミシェル・ペシューが *Cahiers* 誌に寄稿する際に使っていたペンネームである（cf. E. Roudinesco, *ibid*., p. 536）。詳細なラカン伝を著したブータンは、ペシューはアルチュセールの学生だったが、心理学に転向したために、同僚やアルチュセールとの折り合いが悪くなったと述べてい

る（cf. Y. M. Boutang, *ibid*., p. 567）。

57）*Le Séminaire* 出版開始の経緯については、次を参照のこと：E. Roudinesco, *Jacques Lacan*, p. 531 *et seq*. また、ミレールによるラカンのセミナー録の刊行に関しては、刊行に時間がかかりすぎているとの訴えが L'Association des amis de Jacques Lacan からミレールに対してパリ大審裁判所に出されたが、2007年 3 月30日に同裁判所第 3 法廷にてミレール勝訴の判決 (Nº RG : 05/05082) が出ている。cf. *Le Monde* 紙ブログ [http://prdchroniques.blog.lemonde.fr/2007/03/30/lacan-dans-le-pretoire-suite-et-fin/].

58）E. Roudinesco, *ibid*., p. 398 : « Né le 14 février 1944, Jacques-Alain Miller terminait sa licence de philosophie au moment où Althusser lui conseilla de lire Lacan. »

59）E. Roudinesco, *ibid*., p. 399 : « Durant l'année 1964–1965, Miller participa à la lecture du *Capitol* de Marx où fut collectivement élaborée la notion de *lecture symptomale*. Forgée à partir du concept bachelardien de *coupure épistémologique*, elle devait une partie de son inspiration à la refonte lacanienne. »

60）Cf. « Cercle d'Épistémologie », au site Web de l'Université de Middlesex [http://www.web.mdx.ac.uk/cahiers/names/cercle.html].

61）ルディネスコの証言によれば、*Cahiers* 誌とこの *CML* 誌に加えてシャルル・ベッテルハイムの *Études de planification socialiste* 誌が同じ « Société du Graphe » から発行されていた：« À l'intérieur de l'avant-garde théoricienne se forge donc un consensus antirévisionniste qui aboutit entre 1965 et 1966 à la création de trois revues ronéotypées, imprimées chez le même éditeur et centrées autour de l'enseignement de trois maîtres : Charles Bettelheim pour les *Études de planification socialiste*, Louis Althusser pour *les Cahiers marxistes-léninistes* et enfin Jacques Lacan pour les *Cahiers pour l'analyse*. Naturellement chacune de ces revues possède son orientation spécifique, mais toutes trois on en commun, malgré leurs divergences, un retour aux principes fondateurs du combat théorique : l'économie pour la première, le marxisme politico-philosophique pour la seconde, la science et la logique pour la troisième » (E. Roudinesco, *Histoire de la psychanalyse en France*. 2, p. 391)

ルディネスコが証言するように 1 人の指導者を中心として特徴を 3 つの雑誌すべてが持っていたとは、本稿で検討しているように考えにくい。少なくとも *Cahiers* 誌はラカンのための雑誌では在り続けていない。

62）François Dosse, *Histoire du Structuralisme : I. Le Champ du Signe, 1945–1966*, coll. « biblio essais », le Livre de Poche, Éditions La Découverte, Paris, 1992, pp. 331–333. ただしこの点について、ラカン伝を著したルディネスコは、1968年当時において ENS の学生たちの政治的派閥が、「ジャン＝クロード・ミルネールや、ジュディットや、ジャック＝アラン・ミレールをふくむ『分析手帳』のラカン派と、ロベール・リナールを中心とする『マルクス主義者・レーニン主義者の手帳』のアルチュセール派という二つの分派に分化した」（« les lacaniens des *Cahiers pour l'analyse* avec Jean-Claude Milner, Judith et Jacques-Alain Miller, et les althussériens des *Cahiers marxistes-léninistes* avec notamment Robert Linhart. » : E. Roudinesco, *ibid*., p. 437）と述べているが、ドスも認めているように、「*Cahiers* 誌の編集評議会のメンバーがそのままラカンの精神分析団体、パリ・フロイト派のメンバーだった」(« On y retrouve les enfants d'Althusser et de Lacan puisque tous les membres du conseil de rédaction, composé d'Alain Grosrichard, Jacques-Alain Miller, Jean-Claude Milner, François Régnault, sont membres de l'orgranisation de psychanalyse lacanienne, l'École freudienne de Paris. » : F. Dosse, *ibid*., p. 333) としても、後述するように *Cahiers* 誌にはアルチュセールとラカン両者の影響を多分に見て取ることができる。ドスの指摘とは異なり、第 3 号以降第 7 号までミルネは編集評議会のメンバーから外れているのは既に確認したとおりである。

63）F. Dosse, *ibid*., p. 331 : « Diffusés par l'Union des étudiants communistes, les *CML* [*Cahiers marxistes-léninistes*] portent en exergue cette citation de Lénine : "La théorie de Marx est toute-puissante parce qu'elle

est vraie.” »

64）Hervé Hamon et Patrick Rotman, *Génération 1. les années de rêve*, coll. « Points Actuels », Éditions du Seuil, 1987,, p. 313 : « Mais le numéro huit, conçu par Jacques-Alain Miller (avec, notamment, Milner et Macherey), attire les foudres de Robert Linhart. Cette fois, c’en est trop. Une publication entière centrée sur « les pouvoirs de la littérature », un sommaire où s’enchaînent « le grammaire d’Aragon », « une fiction de Borgès », « L’Optique de Gombrowicz », nous voilà en plein « théoricisme » ! » ここで言及されている論文のうちゴンブローヴィッチとアラゴンに関する同名の論考が、*Cahiers* 誌第 7 号に掲載されている：Jean-Claude Milner « Grammaire d’Aragon », *Cahiers pour l’Analyse*, nº 7, pp. 45–56 ; François Regnault, « Optique de Gombrowicz », *ibid*., pp. 57–70.

65）Union des Jeunesses Communistes Marxistes-Léninistes (UJCML) は UCE から分離した学生のコミュニスト団体。UCE から UJCML が分離する経緯については次に詳しい。Cf. H. Hamon et P. Rotman, *op. cit.*, pp. 327–330 :

« Les 10 et 11 décembre 1966, au théâtre d’Ulm une centaine de militants exclus de l’UEC fondent l’Union des jeunesses communistes (marxistes-léninistes). Quelqu’un propose d’ajouter un F au sigle, mais Robert s’insurge : “Nous sommes internationalistes, nous n’avons pas de patrie !”

Garde rouge commente l’événement : “[Guy] Hermier, [Jean-Michel] Catala et autres constituent le fonds à partir duquel vont progressivement et rapidement se détacher les 95% des étudiants communistes à Paris, la majorité des étudiants en province, dont la lutte se développe, du fait de l’isolement soigneusement ménagé par les liquidateurs, selon un rythme moins égal…”

L’UJC(ml), ayant absorbé l’ex-UEC, attirera ensuite la majorité des “communistes honnêtes” trompés par l’ex-PCF. » (*Ibid*., p. 328)

66）F. Dosse, *ibid.*, pp. 332–333 : « C’est ce qu’un certain nombre d’althussériens, dont Dominique Lecourt et Robert Linhart, n’ont pas supporté à propos du numéro 8 des *Cahiers marxistes-léninistes*, préparé par Jacques-Alain Miller, François Régnault et Jean-Claude Milner : “Il nous avait paru d’un esotérisme total, et il y eut une scission à l’issue de séances ahurissantes qui devaient durer jusqu’à 3 heures du matin. Nous y discutions de la rupture épistémologique et du Signifiant. Je me souviens notamment de la grande séance de rupture où Robert Linhart discutait avec Jean-Claude Milner du Signifiant et de l’insignifié du Signifiant pendant des heures pour savoir en quoi c’était matérialiste. Cela avait une certaine tenue.”

C’est de cette rupture qu’émane la revue de la jeune génération althussérienne, *Les Cahiers pour l’analyse* que l’on peut qualifier de revue althusséro-lacanienne. »

67）Cf. L. Althusser, *ibid*., p. 240 : « Nous travaillâmes sur le texte du *Capital* pendant tout l’été 1965. Et à la rentrée ce fut Rancière qui, à notre grand soulagement, accepta d’essuyer les plâtres. Il parla trois fois deux heures avec une précision et une rigueur extrêmes. Je me dis encore que sans lui rien n’eût été possible. » *Lire le Capital* の第 1 巻はアルチュセール、ランシエールとマシュレの共著であることは周知の通りである。

68）« causalité métonymique » という概念がミレールに由来することについてアルチュセールは、*Lire le Capital* の中でも触れている：« Ainsi nous ont servi de repères certains concepts importants, élaborés en d’autres circonstances, et qui sont présents à ces textes : par exemple les notions groupées autour du concept de “causalité métonymique”, défini par J.-A. Miller au cours d’un Séminaire précédent, qui portait sur la lecture de Freud par J. Lacan. » (Louis Althusser, « Avertissement », dans Louis Althusser, Jacques Rancière, Pierre Macherey, *Lire le Capital*, tome I, coll. « Théorie » II, François Maspero, Paris, 1966, p. 91.)

69）Cf. L. Althusser, *ibid*., pp. 240–241 : « Mais l’année finit très mal : je ne sais par quelle dialectique c’est moi-même qui finis, à la place de Rancière, par être accusé par Miller de lui avoir volé le concept de « causalité métonymique ». »

70）Cf. L. Althusser, *ibid*., pp. 240–241 : « Les concepts ne sont-ils pas à tout le monde ? C'était bien mon avis, mais Miller alors ne l'entendait pas de cette oreille. Je ne conte pas cet incident ridicule pour accabler Miller, il faut bien que jeunesse se passe. Et d'ailleurs il a, paraît-il, commencé cette année son cours magistral sur Lacan en disant solennellement : "Nous n'allons pas étudier Lacan mais être étudiés par lui." Preuve qu'il est aussi capable de reconnaître à autrui l'intervention et la propriété d'un concept… »

注68)で引用したようにアルチュセール自身が *Lire le Capital* の中でその概念がミレールに由来することに言及し、ランシエールも発表原稿の前書きでミレールの名前に言及していることなどから考えると、アルチュセールとランシエールの対応でミレールが矛を収めたとも考えられる：« Je m'appuierai dans cette étude sur un certain acquis théorique constitué par les travaux de L. Althusser (cf. *Pour Marx*, Collection Théorie, F. Maspero, Paris 1965), et les concepts identifiés et élaborés par J. A. Miller, à l'occasion d'exposés (non publiés) prononcés au cours de l'année 1964, et consacrés à la théorie de J. Lacan et à la critique de la psychologie de G. Politzer. J. A. Miller a montré le caractère décisif de ces concepts pour la lecture du Capital dans son texte : "Fonction de la formation théorique" (*Cahiers marxistes-léninistes* nº 1). » (Jacques Rancière, « le Concept de critique et la critique de l'économie politique des "Manuscrits" de 1844 au "Capital" », dans L. Althusser *et al.*, *op. cit.*, p. 96.)

71）ギュスドルフの前任者は、モーリス・メルロ＝ポンティ：« À l'École, en ce temps, nous avions pour maîtres Desanti, petit Corse qui « cheminait (déjà) avec combativité », mot de lui qui le peint tout entier et Maurice Merleau-Ponty. Ce dernier, dont nous suivion les cours avec intérêt (le seul cours que j'aie suivi avec les leçons toujours répétitives de Desanti, « marxiste » demeuré fort husserlien), nous avait proposé, Jacques Martin, Jean Deprun et moi, de publier nos diplômes, avant même de les lire. » (cf. L. Althusser, *ibid*., pp. 186–187).

72）« Le poste agrégé répétiteur est souvent un poste d'attente ou de passage entre la fin de la thèse et l'Université. » : Yann Moulier-Boutang, *Louis Althusser, une biographie*, *T2 1945–1956*, coll. « le Livre de Poche : biblio/essais », Éditions Grasset & Fasquelle, Paris, 1992, p. 307. 日本語訳については、以下を参考にした：ヤン・ムーリエ・ブータン、今村仁司、塚原史、谷昌親、下澤和義、吉本素子訳、『アルチュセール伝　思想の形成〈1918–1956〉』、筑摩書房、1998。本稿の以下の部分で、アルチュセールの ENS での活動については同書を参照した。ただし、同書が対象としているのは1956年までであり、*Cahiers* 誌が発行された1966年当時の状況については、刊行未定の続刊で記述される予定になっている。それ故、本論での記述はアルチュセールが ENS に着任した当時の状況についてであり、本論で扱っている時期には当てはまらない可能性もあることを付言しておく。また、アルチュセールに関する資料は、現在カーンにある Institut Mémoire de l'Édition Contemporaine (IMEC) に6,000点近くが保管されている。cf. http://www.imec-archives.com/fonds_archives_fiche.php?i=ALT.

73）Y. M. Boutang, *ibid*., pp. 424–425 : « L'École noramle ne procède pas à une description de ses emplois. Elle garde vis-à-vis de l'Université et du Ministère une distance soigneuse ; ainsi un caïman, comme le marque ce terme, incompréhensible aux non-initiés, n'est pas un professeur, ni un assistant, ni un lecteur. Ce n'est pas non plus un professeur agrégé du secondaire. Ses obligations statutaires son définies oralement dans "la maison". »

74）« Althusser, qui a eu le loisir de réfléchir à ce problème ainsi qu'aux aléas psychologiques de l'oral où il a vu chuter quelques cas célèbres, met au point une technique qui ne bougera plus pendant trente-deux ans. Il réunit en début d'année scolaire les conscrits (c'est-à-dire la nouvelle promotion) et demande à ceux qui veulent s'engager dans la philosophie de lui rendre une dissertation dès le premier trimestre. Dissertation corrigée soigneusement sur une page intercalaire et rendue au cours d'un entretien individuel qui servait aussi à confirmer ou infirmer l'orientation choisie. Cet entretien était suivi éventuellement de quelques conseils sur les cours à suivre à l'École normale, ou en faculté, essentiellement en Sorbonne, sur un directeur de mémoire

de DES. Puis les élèves de philosophie ne retrouvaient institutionnellement leur caïman que l'année de la préparation à l'agrégation et de façon plus suivie. Parfois ils assistaient à certains cours ou faisaient un exposé sur leur mémoire pour les agrégatifs. Le reste était une affaire d'amitié, ou de demande des élèves. » (Y. M. Boutang, *ibid*., pp. 395–396.)

75）« […] : à vrai dire, [le Secrétaire de l'ENS] n'a pas de rôle direct dans les décisions qui sont prises par le Directeur, le sous-directeur, ou par les différents Conseils Scientifiques ou de Discipline. Le Secrétaire n'a pas le pouvoir de décider. Mais il est au courant de la vie administrative de l'École, des travaux projetés, des problèmes de scolarité des élèves, des réformes universitaires ou des remaniements des modalités du concours d'entrée, des mouvements de postes des caïmans, des agents et des directeurs, des questions disciplinaires. » (Y. M. Boutang, *ibid*., p. 425.)

76）D. Macey, *op. cit.*, pp. 46–47 : « Foucault et Althusser se lisèrent d'amitié à la fin des années 1940 et le premier tira grand profit des conseils de son aîné. C'est sur les conseils d'Althusser que Foucault refusa de se faire hospitaliser pour résoudre ses problèmes dépressifs, et au début de sa carrière il fut fortement influencé par le "vieil Alt", comme on l'appelait affectueusement à l'E.N.S. L'amitié bien réelle qui noua entre eux allait résister à toutes les divergences politiques et devait également survivre à leurs tragédies et déchirements personnels. Elle résista également aux sarcasmes dont Althusser se plaisait à accabler son entourage. Althusser ne se montra pas toujours charitable dans ses commentaires sur Foucault, loin de là. Lorsqu'il apprit que Foucault étudiait la folie et passait son temps à l'hôpital psychiatrique de Sainte-Anne, il observa en présence du jeune historien anglais Douglas Johnson, qui séjourna à l'E.N.S. entre 1947 et 1949, qu'on devrait l'y enfermer. »

77）Louis Althusser, « Sur *le Contrat social* », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 8, pp. 5–42. この論文は1965–1966年度にアルチュセールがENSで行った講義を再録したものである。

78）J.-A. Miller, « Avertissement », *op. cit.*, p. 1 : « Qu'au premier chef cette recherche importe au matérialisme dialectique, qui en douterait, à considérer la portée que lui a reconnue Louis Althusser, et l'état où il est à ce jour ? » (p. 1)

79）Louis Althusser *et al.*, *Lire le Capital*, p. 11 : « Les exposés que voici ont été prononcés au cours d'un Séminaire d'études consacré au *Capital*, dans les premiers mois de 1965, à l'École Normale. » 日本語については、次の訳書を参考にした：ルイ・アルチュセール、『資本論を読む』、権寧・神戸仁彦訳、合同出版、1974年（1982年改装）、p. 12. この日本語訳は、原書 *Lire le Capital* の1968年版（1965年の初版ではなく改訂版）を訳したものである。

80）ルイ・アルチュセール、「日本の読者へ」、『マルクスのために』、河野健二・田村俶・西川長夫訳、平凡社ライブラリー61、平凡社、1994、p. 11.　また、« Aujourd'hui » と題された原書では、« le recueil de ces quelques notes, qui parurent, au cours des quatres années, dans différentes revues. » とだけ述べている：Cf. Louis Althusser, *Pour Marx*, coll. « Théorie », I, François Maspero, Paris, 1975, p. 11.

81）« Les "Cahiers pour l'Analyse", publiés par le cercle d'épistémologie de l'Ecole Normale Supérieure, se proposent de présenter des textes, inédits ou non, touchant à la logique, à la linguistique, à la psychanalyse, à toutes les sciences d'analyse — à cette fin de contribuer à la constitution d'une théorie du discours. » (Jacques-Alain Miller, « Avertissement », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 1, 1966, p. 1.)

82）Jacques Lacan, « La Science et la vérité », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 1, 1966, pp. 6–28. テクスト末に « 1er décembre 1965 » とされており、同日にラカンが行ったENSでの講義をテクスト化したもの。

83）Yves Duroux, « Psychologie et logique », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 1, 1966, pp. 31–36 : « compte-rendu, non revu par l'auteur, d'un exposé prononcé le 27 janvier 1965 au séminaire du Docteur J. Lacan » (p. 31) ; Jacques-Alain Miller, « La suture (Éléments de la logique du signifiant) », *ibid*., pp. 37–49 (p. 37) : « repris d'un exposé prononcé le 24 février 1965 au séminaire du docteur J. Lacan. » ; Serge Leclaire, « L'analyste à

sa place », *ibid*., pp. 50–52 : « compte-rendu d'une intervention prononcée le 24 mars 1965 au séminaire du docteur J. Lacan. » (p. 50)

84）Jacques Lacan, « Réponses à des étudiants en philosophie sur l'objet de la psychanalyse », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 3, pp. 5–13, 1966 : « les questions ici reproduites ont été adressées au docteur Lacan par un groupe d'étudiants de la Faculté des Lettres de Paris. Le texte en a été rédigé par M. G. Contesse. Nous remercions celui-ci d'avoir accepté que nous le reprenions. » (p. 5)

85）André Green, « L'objet (a) de Jacques Lacan, sa logique et la théorie freudienne », *ibid*., pp. 15–37 : « relation écrite et développée d'une conférence prononcée au séminaire du Docteur Lacan, le 21 décembre 1965. » (p. 15)

86）Serge Leclaire, « Compter avec la psychanalyse (Séminaire de l'E.N.S., 1965–1966) », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 1, 1966, pp. 53–70 ; Serge Leclaire, « Compter avec la psychanalyse (Séminaire de l'E.N.S., 1965–66) », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 3, pp. 83–96, 1966 ; Serge Leclaire, « Séminaire de l'E.N.S., 1966–67 », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 8, pp. 91–119.

87）ルクレールは、« Compter avec la psychanalyse » と題した講義録への序文の中で、他者やシニフィアンなどにも言及することで、認識論研究を射程に捉えつつ精神分析の重要性、さらには精神分析におけるラカンの重要性を強調している：« La pratique de la cure psychanalytique confronte celui qui l'approche à l'existence du sujet désirant ; ce sujet, que l'on peut dire sujet de l'inconscient ne trouve de place dans aucune psychologie de même qu'il semble exclu de toute logique des énoncés. Aussi le psychanalyste, engagé dans son expérience, doit-il nécessairement considérer — comme J. Lacan l'a souligné — les références fondamentales de ce sujet que sont, et l'altérité, et le signifiant, dans leurs rapports avec la réalité de la différence sexuelle et le mythe de l'objet perdu. En même temps que l'inconscient et que la fonction centrale du manque, se dévoilent ainsi les impasses du savoir et l'ordre du fantasme. » (Serge Leclaire, « compter avec la psychanalyse », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 1, p. 55, 1966 et repris dans nº 3, p. 83.)

88）Serge Leclaire, « Parler avec le Psychanalyste » (comte-rendu d'Alain Grosrichard d'un séminaire du 17 novembre 1965 à l'ENS), dans *Cahiers pour l'Analyse*, nº 1, janvier, 1966, pp. 55–59 ; Serge Leclaire, « Fantasme et théorie » (compte-rendu de François Baudry d'un séminaire du 1er décembre 1965 à l'ENS), *ibid*., pp. 59–65 ; Serge Leclaire, « Du Corps à la lettre » (compte-rendu de Jean Mathiot du 15 décembre 1965 à l'ENS), *ibid*., pp. 66–70. これらの講演は ENS の学生からの依頼で実現した（cf. « […] à la demande des élèves de l'ENS, Serge Leclaire consacre un séminaire rue d'Ulm au rapport de l'expérience analytique avec sa théorisation.Grâce à cet échange, des liens se nouent entre la salle Dussane [à l'ENS], le cercle d'épistémologie et l'EFP [Ecole Freudienne de Paris] naissante. », Elisabeth Roudinesco, *Histoire de la psychanalyse en France. 2 1925–1985*, Librairie Arthème Fayard, 1994, p. 407）。

89）Serge Leclaire, « Les Pulsions exposé du Dr. Leclaire » (compte-rendu de F. Guery de la séance du 12 janvier 1966), *Cahiers pour l'Analyse*, nº 3, pp. 84–88 ; Serge Leclaire, « Éléments pour une problématique psychanalytique du désir exposé du Dr. Leclaire » (compte-rendu de J. Nassif de la séance du 2 février 1966), *ibid*., pp. 89–96.

90）Résumé de S. Leclaire à partir d'un compte-rendu de P. Guymard, « Structure et jouissance (I) » (séance du 23 novembre 1966), *Cahiers pour l'Analyase*, nº 8, pp. 92–93 ; compte-rendu de Marie-Claire Boons, « Structure et jouissance (II) » (séance du 7décembre 1966), *ibid*., pp. 93–97 ; compte-rendu de Gérard Pislor, « Le Concept psychanalytique de corps (I) » (séance du 11 janvier 1967), *ibid*., pp. 97–101 ; compte-rendu de B. Tort, « Le Concept psychanalytique de corps (II) » (séance du 25 janvier 1967), *ibid*., pp. 101–105 ; compte-rendu de Danièle Cottet, « Le Privilège du phallus » (séance du 22 février 1967), *ibid*., pp. 105–109 ; résumé de S. Leclaire, « Le Conscient considéré comme effet du refoulement » (séance du 8 mars 1967), *ibid*., pp. 110–113 ; résumé de Claude Conte à partir de son exposé, « L'Inconscient et son rapport à la

sexualité » (séance du 14 décembre 1966), *ibid*., pp. 113–119. また、コントの発表が行われた1966年12月14日には、コントの他にも3人が発表している：« (2) Ont également prononcé un exposé : F. Baudry, J. Nassif, C. Backès. » (p. 113).

91）Jacques Derrida, « Avertissement », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 4, 1966, pp. 3–4.

92）Jacques Derrida, « Nature, Culture, Écriture (la violence de la lettre de Lévi-Strauss à Rousseau) », *ibid.*, pp. 5–50 : この論文はENSでデリダが« Écriture et Culture »という題目で行った2回分の講義の原稿で、後の *De la Grammatologie* (1967) で展開されることになる議論と同じ枠組みを確認することができる。また第4号では、1817年のBlin版のルソーの言語起源論から最初の11章をそのまま再掲載している。

93）Machiavel, « Le retour aux origins (Pour qu'une religion et un état obtiennent une longue existence, ils doivent souvent être ramènes à leur principe ; *Discorsi*, III, 1) », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 6, 1967, pp. 63–66. マキアヴェリのテクストに限らず、*Cahiers* 誌では既刊行論文を再録すると同時にそれに関する書き下ろし論文を掲載する点が特徴的である。全体で75編のテクストが掲載されているが、未刊行の原稿はそのうちほぼ半分にあたる38編であり、残りの37編は講義・講演録やその報告、ゼミの発表原稿、既発表論文や翻訳で構成されている。

94）Descartes et Elisabeth, « Quatre lettres sur Machiavel », *ibid*., pp. 53–62.

95）David Hume, « Quatre essais politiques sur l'autorité », *ibid*., pp. 75–99.

96）Georges Dumézil, « Lecture de Tite-Live, suivi de Les Transformations du troisième du triple », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 7, 1967, pp. 5–42.

97）*Cahiers* 誌に掲載されたテクストを分類して年毎に合計すると次のようになる：

	TOTAL	1966	1967	1968	1969
書き下ろし原稿	45	14	13	13	5
講義・講演録	9	6	3	0	0
報告（講義・講演）	14	7	7	0	0
発表原稿	3	2	1	0	0
抜粋・再録	20	5	5	6	4
翻訳	7	1	6	0	0
	98	35	35	19	9

98）Claude Lévi-Strauss, « À propos de "Lévi-Strauss dans le XVIIIe siècle" », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 8, pp. 89–90. « Lévi-Strauss dans le XVIIIe siècle » と題されて発行された *Cahiers* 誌第4号に対してレヴィ＝ストロースが同誌宛てに出した手紙を同氏の許可を得て掲載したテクスト。レヴィ＝ストロースは次のように述べてデリダの論文に対する不快感を表明している：« Les considérations philosophiques ne sont que les socles improvisés sur lesquels, pour les mettre en valeur, je monte ces précieux objets [de la saveur unique d'un style de vie, d'une institution, d'une croyance, d'un groupe de représentations…]. Je réponds ainsi du même coup à la question sournoise, posée quelque part en note, de savoir si l'ethnologue se veut ingénieur ou bricoleur ! » (p. 90) ここでレヴィ＝ストロースが言及している « question » とは、デリダが論文の注における次のような言及をさす：« Dans le meilleur des cas, le discours bricoleur peut s'avouer lui-même, avouer en soi-même son désir et sa défaite, donner à penser l'essence et la nécessité du déjà-là, reconnaître que le discours le plus radical, l'ingénieur le plus inventif et le plus systématique sont surpris, circonvenus par un histoire, un langage, etc…, un monde (car monde ne veut rien dire d'autre) auquel ils doivent emprunter leurs pièces, fût-ce pour détruire l'ancienne machine (la bricole semble d'ailleurs avoir été d'abord machine de guerre ou de chasse, construite pour détruire. Et qui peut croire à l'image du paisible bricoleur ?). L'idée de l'ingénieur rompant avec tout bricolage relève de la théologie créationniste. Seule une telle théologie peut accréditer une différence essentielle et rigoureuse entre

l'ingénieur et le bricoleur. » (*ibid*., p. 50)

99) Gaston Bachelard, « La classification des éléments d'après Mendéléeff », *Cahiers pour l'Analyse*, nº 9, 1968, pp. 200–206.

100) Jean le Rond d'Alembert, « Éléments des sciences », *ibid*., pp. 207–218 ; repris de l'article « Éléments des sciences » de *l'Encyclopédie*.

101) George Boole, « L'analyse mathématique de la logique », traduction de Y. Michaud, *Cahiers pour l'Analyse*, nº 10, 1969, pp. 27–34 ; traduction de l'introduction et du 1er chapitre de George Boole, *The Mathematical Analysis of Logic*, Cambridge, Mac Millan, 1847.

102) Bertrand Russell, « La théorie des types logiques », *ibid*., pp. 53–83 ; Extrait de la *Revue Métaphysique et de Morale*, XVIII, 1910. Reproduit avec l'autorisation de Bertrand Russell.

103) Kurt Gödel, « La logique mathématique de Russell », *ibid*., pp. 84–107 ; traduction de « Russell's Mathematical Logic », in *The Philosophy of Bertrand Russell*, edited by P. A. Schilpp, The Library of Living Philosophers, Tudor Publishing Company, New York, 1944, p. 125–153. Texte traduit par J.-A. Miller et J.C. Milner avec l'autorisation des éditeurs et de Kurt Gödel,

104) *Cahiers pour l'analyse*, nº 8, octobre, 1967, pp. 91–113 : Serge Leclaire, « Séminaire de l'ENS, 1966–1967 », p. 91 ; Serge Leclaire, « Exposé de Serge Leclaire : Structure et Jouissance (I) (23 novembre 1966) », résumé de Serge Leclaire, *ibid*., pp. 92–93 ; Compte-Rendu de Marie-Claire Boons, « Exposé de Serge Leclaire : Structure et Jouissance (II) (7 décembre 1966) », *ibid*., pp. 93–97 ; Compte-Rendu de Gérard Pislor « Exposé de Serge Leclaire : le Concept psychanalytique de Corps (I) (11 janvier 1967) », *ibid*., pp. 97–101 ; Compte-Rendu de B. Tort, « Exposé de Serge Leclaire : le Concept psychanalytique de Corps (II) (25 janvier 1967) », *ibid*., pp. 101–105 ; Comte-Rendu de Danièle Cottet, « Exposé de Serge Leclaire : le Privilège du Phallus ou la reprise de l'Objet par le signifiant (22 janvier 1967) », *ibid*., pp. 105–109 ; Serge Leclaire, « Exposé de Serge Leclaire : le Conscient considéré comme effet du refoulement (8 mars 1967) », *ibid*., pp. 110–113.

105) Jacques-Alain Miller, « Avertissement » à « Action de Structure », *Cahiers pour l'analyse*, nº 9, été 1968, p. 93 : « *Ce texte demande d'être introduit par ses circonstances. Le 27 juin 1964, Jacques Lacan fondait l'École Freudienne de Paris et l'ouvrait aux non-analystes. Quelques élèves de l'École normale, pour y adhérer, se groupèrent comme l'exigeaient les statuts, dans un "cartel" qui se désigna par l'objet de son intérêt :* Théorie du Discours. *Les pages qu'on va lire étaient destinées à justifier le titre sous lequel les membres de ce groupe comptaient inscrire leurs travaux, tributaires et datés du même champ conceptuel. Elles devaient paraître dans l'Annuaire de l'École Freudienne, qui ne fut en définitive qu'une liste de noms, et ainsi elles restèrent en rade.* »

106) Jean Ladrière, « Le Théorème de Löwenheim-Skolem », *Cahiers pour l'analyse*, nº 10, hivers 1969, pp. 108–130 ; Robert Blanché, « Sur le Système des connecteurs interpropositionnels », *ibid*., pp. 131–149 ; Alain Badiou, « Marque et manque : à propos du zéro », *ibid*., pp. 150–173 ; Jacques Bouveresse « Philosophie des mathématiques et thérapeutique d'une maladie philosophique : Wittgenstein et la critique de l'apparence "ontologique" dans les mathématiques », *ibid*., pp. 174–208.

107) とはいえ、ルディネスコによれば、面識のなかったアルチュセールに最初に接触したのはラカンの方だった：« En juillet 1963, Lacan print contact avec Louis Althusser, attendant de celui-ci qu'il le fit venir à l'ENS. » (E. Roudinesco, *Jacques Lacan*, p. 387). ラカンとアルチュセールの交流については以下を参照のこと：*Ibid*., pp. 383–402.

108) E. Roudinesco, *Jacques Lacan*, p. 265 : « Cette année-là [en 1949], il commençait à rassembler autour de lui les éléments les plus brillants de la troisième génération psychanalytique française et, parmi eux, les mousquetaires de la future troïka : Serge Leclaire, Wladimir Granoff, François Perrier. »

109）ルクレールはラカンとの関係が悪化することを予測しつつも、パリ第8大学で心理学研究室を開設することを決意する：E. Roudinesco, *Histoire de la psychanalyse en France. 2*, pp. 557–560. また、ルクレールはストラスブール時代は « Serge Liebschutz » と名乗っていたが、セルジュの父がマルセイユで « Leclaire » という偽名で書類を取得してから « Leclaire » を名乗る。ルクレールの生い立ちについては次を参照のこと：*ibid*., pp. 292–294.

110）E. Roudinesco, *ibid*., p. 405 : « Lacan travailla tout l'été à la rédaction des statuts de son école et ajouta à son acte de fondation une « Note adjointe » qui précisait les modalités d'adhésion, et un « Préambule » où était analysée la signification du mot *école*. ».

111）アルチュセールが *Revue de l'enseignement philosophique* 誌1963年7月号に書いた « Philosophie et sciences humaines » を発表と同時に読み、アルチュセールが論文で展開しているマルクスにおける認識論的断絶を、ラカンがフロイトにも認めていると注で述べていたことに、ラカンは興味をもつ（cf. Louis Althusser, *L'Avenir dure longtemps suivi de Les Faits*, Éditions Stock / IMEC, 1992, p. 214 ; Roudinesco, *Jacques Lacan*, p. 387）。とはいえ、ラカンがマルクスやアルチュセールの思想に興味を持ったわけではなく、ラカンとしては ENS の学生を自分の派閥に取り込みたいと考えてのことだった：« À l'évidence, Lacan ne s'intéressait nullement à la pensée d'Althusser et ne croyait pas à son projet d'une refonte du marxisme. Une seule chose était en jeu pour lui dans cette rencontre : les élèves de l'ENS. » (cf. E. Roudinesco, *ibid*., pp. 392–393)

112）« Comme je le [=Lacan] voyais fort embarrassé depuis la menace de son exclusion de la clinique de Sainte-Anne, je lui offris l'hospitalité de l'École. »（cf. L. Althusser, *op. cit.*, p. 214）ラカンによる ENS での講演は、パリ解放後の1945年11月にアルチュセールの前任者であったジョルジュ・ギュスドルフの招聘により実現している。アルチュセールはこの講演を聴き、当時はラカンに対して非常に否定的な印象を抱いていた（cf. E. Roudinesco, *ibid.*, pp. 387–388）。

113）タイトルは « L'Excommunication » で、当初の予定では1月15日開催だった：« À Noël, [Lacan] prépara longuement le texte de sa première intervention qui devait avoir lieu le 15 janvier 1964. » (E. Roudinesco, *ibid.*, p. 395). 21日に延期された後は、2回開催されることになる：« Le 21 janvier, il présenta à l'ENS son premier exposé sur l'œuvre du maître. Deux autres suivront. » (*ibid.*, p. 398.) 引用した最後の一文に付されたルディネスコの注は、典拠として IMEC 所蔵のアルチュセールの資料を示している：« Notes de Louis Althusser sur l'exposé de Jacques-Alain Miller des 21 et 28 janvier et 4 février 1964, IMEC. Notes de cours ; Étienne Balibar. Juste avant Jacques-Alain Miller, Étienne Balibar avait parlé de la thèse de 1932 et du concept de forclusion. Note de Louis Althusser du 17 décembre 1963, IMEC. » (Note 31, *ibid*., p. 608)

114）E. Roudinesco, *Jacques Lacan*, p. 398 : « Autant Louis Althusser, Michel Tort et Étienne Balibar s'efforçaient d'expliquer la genèse des concepts freudiens, puis de montrer comment Lacan en avait effectué la relève en s'appuyant sur la linguistique structurale et sur l'antipsychologisme, autant Jacques-Alain Miller livrait à ses auditeurs une « doctrine clé en main », construite comme une totalité sans contradiction et entièrement déshistorisée. Le Lacan lu par Miller en janvier 1964 était un Lacan au présent, vidé de son passé kojévien, surréaliste et wallonien. Seul subsistait, comme instrument d'un retour à Freud, un défilé de noms : Jakobson, Benveniste, Saussure. Ce retour semblait être tombé du ciel par la grâce d'une simple opération logique. Certes, Miller ne fut pas le seul à cette époque à lire Lacan de cette manière. Au cœur de l'explosion structuralisme des années 1963–1968, l'ensemble de l'intelligentsia lut l'œuvre lacanienne à travers la grille des textes structuralistes de Lacan rédigés entre 1950 et 1962. Elle découvrit exclusivement le Lacan du « Discours de Rome », de l'instance de la lettre, de la forclusion, etc. Mais Miller fut le seul à aller plus loin dans la représentation strictement « structuraliste » de l'œuvre du maître. »